

---

# かみもぐ日記

K Y O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かみもぐ日記

### 【Nコード】

N1498P

### 【作者名】

KYO

### 【あらすじ】

転生した世界はゴッドイーターの世界だった。

荒廃した世界で、新人の芹沢トウヤ君が自慢の逃げ足で走りまわる話。

目指せ生還！目指せ生きてシナリオ突破！

前作アラガミ日記のキャラは多分出ません。

## プロローグ ようこそクソツたれな世界へ

すっかり死んでしまった俺だったんだが、気が付けば天国に行く事も無くまた新たに人間として誕生していた。

輪廻転生は本当にあつたのかと驚き、しかも記憶を持ったまま転生などまるで作り話みたいだと思わず混乱してしまったものの、それでもせっかく新たに命を授かったんだから頑張って生きようと決めた。

前世では学生時代にろくに勉強していなかったせいで少し苦労したので、今度は真面目に勉強して、運動もしてリア充になろうと思っていた。

ところが俺が再誕した世界はそんな甘い事を言っていられる世界じゃなかった。

過去に突如発生したというオラクル細胞、それが集合して生物の形になった化け物『アラガミ』が世界を覆いつくそうとしている時代。そんなゲームの様な世界だった。

生物はおるか人工物、自然までも貪欲に喰らい尽くすアラガミ達によって世界の人口は激減し、聞いた話によるとアメリカはもう国としても形は残っていないらしい。

そして俺が生まれた極東はアラガミ討伐の最前線だ。大陸から離れてて四方を海に囲まれているのに何故最前線になるのか疑問過ぎるが、事実最前線なんだから気にしても仕方が無い。

最前線という事は、つまりとても危険という事だ。実際に俺が住んでいる外部居住区でもアラガミの被害が出た事がある。

防衛班のゴッドイーター達が頑張ってくれているのでそこまで多くの被害が出ていないが、それでも初めて実際のアラガミを見た時

は物凄く怖かった。

オウガテイル。尻尾に鬼の顔の様な模様を持つ獣型の小型アラガミが、俺が初めて実物を見たアラガミだった。

小型と言えども大型犬よりも大きく、頭から尻尾までの長さだと俺の身長よりも大きいものも居るくらいだ。そんな化け物が飛び掛ってきたり針を飛ばしてくるのだからたまったもんじゃない。

幸い今世は足の速さには自信があった為逃げられたが、近くに居たゴッドイーターが倒してくれなければ俺は体力切れで喰われていただろう。

その時助けてくれたゴッドイーターの大森タツミさんは、

「その足の速さなら、ゴッドイーターになっても長生き出来そうだな！」

とか言っていたが勘弁してください。

17歳の誕生日。仕事も無く無職だったので、とりあえずアラガミから逃げ切れる様に体を鍛えつつも近隣の人達の手伝いをして生きていた俺にフェンリルから赤紙が来た。

あ、勿論赤紙というのはものの例えで、実際に来るのは手紙と書類だ。ゴッドイーターになれる素質を持つ者は、ほぼ強制的に徴兵されるのだ。戦力が少ないから仕方ないと言えば仕方ないんだが・  
・嫌だ。

といつても断れる訳も無く、少ない私物を大きいバッグに詰め込んで、持って行けないものは近隣に住んでいる人達にあげる事にした。

両親が居ればそのままにするものの、残念ながら数年前に死んでしまっている。アラガミに喰われたのではなく病気で死んだので、死体がきちんと残っていたのは幸いだった。

アラガミに襲われたなら指や腕しか残らないというのがザラだった。

たから。

・・・しかし適合試験か。なーんか嫌な予感がする。まさかな。

「すみません、赤がm、適合試験を受けに来たんですけど」

「（赤紙？）はい、通知に同封された書類はお持ちですか？」

「あ、はい」

「・・・はい。芹沢トウヤさんですね。試験の準備は既に完了して  
いますので、そちらから出て右へ向かって下さい。一番奥が試験場  
になりますので」

「はい、わかりました」

受付の竹田ヒバリちゃんが右手で示した背後の扉。さつきもこの  
ロビーに入る時に通った扉だ。

説明された通りに扉を出て右へ進む。アナグラの職員と思わしき  
人やゴッドイーターと何度もすれ違うが・・・全体的に露出が多い。  
特にゴッドイーター。おまえらそんなに布が嫌いか。ちくちくする  
のが嫌か。

へそだしルックの女性を見て腹が冷えないのか気になったりした  
が、気が付いたら既に試験場に到着していたので気を取り直した。

どうやら試験は模擬訓練場で行うらしい。ぶっちゃけると物凄く  
嫌な予感がするがさつきと入ろう。

中に入るとただっ広い空間が広がっていて、部屋の中心には前世  
で見た事のある装置があった。部屋の上にはガラス張りの部分  
があり、そこからはアナグラ職員と思われる人達が見えた。

ああ、見た事のある風景だ。実際にこの目で見た訳じゃないが、

それでも見た事がある。そう、前世でハマってプレイしたゲームで何度か。

・・・よし落ち着け。まだそうだと決まった訳じゃない。ここま  
で来たとはいえ、まだこの後の展開には三種類存在している筈だ。

まあその三種類のうち、一つが死、一つが普通のゴッドイーター、  
一つがシナリオ通りなんだが。出来れば普通のゴッドイーターが望  
ましい。

「長く待たせてすまない」

辺りに響くのは男性の声。かつてPSPのスピーカーから何度も  
聞いた声と台詞だった。

「さて、ようこそ・・・人類最後の砦、フェンリルへ。今から対ア  
ラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適合試験を始める」

これも聞いた事のある台詞。この展開は不味い。このままでは自  
動的に激戦に巻き込まれる羽目になるルートになりかねない。

しかしここまで来た俺には逃げる手段は無い。それこそ、今回適  
合試験を行う神機が旧型である事を祈るしかない。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい」

(絶対嘘だろ・・・)

既に適合試験の内容やこの声の主の事を知っている俺からすると、  
いまいち信じられない。というかい結果って何なんだろうか。適  
合率が上がるのか？

「心の準備が出来たら、中央のケースの前に立ってくれ」

さつさとケースの前に向かう事にする。準備など赤紙が来た時点で既に出来ている。半ば自棄になっている部分もあるが。

スタスタと早歩きで進み、半円型に窪んでいる箇所へ腕を乗せる。端から見ると全然リラックス出来て無い様に見えるが、そもそもこんな試験を受けさせてる人間がリラックスしろなんて言う方が間違ってると思う。

というか内心物凄く怖い。たしかこの後って腕挟まれてグチュグチュされるんだよな・・・勘弁して欲しい。絶対痛い。

そして腕を置いて数秒後、ケース上部が勢いよく落ちて俺の腕は挟まれた。

「うゝあゝあゝあゝあああ！！！！！」

痛い痛い痛い！！でもそれ以上に気持ち悪い！！

明らかに腕に何か突き刺さって入り込んでくる感覚が不快で、それが腕から全体に広がっていて、そしてそれが痛い。恐らくオラクル細胞が俺の体を捕食して作り変えているんだろう。

これだけの激痛に襲われていてもそれなりに冷静な思考が出来るのは、前世で死んだ時にもっと痛い思いをしたからだろうか。どう死んだか覚えてないけど。

そして暫くすると体中が侵食される様な不快感は収まり、それと同時に痛みも和らいだ。・・・適成功の様だ。

ケースが開くと腕輪・・・正式名称『P53アームドインプラント』が装着された右腕が現れた。

ここで改めて適合試験に使った神機を持ち上げて、冷静に見る事が出来た。ショートブレードと思われるサイズの剣と、装甲と思わしき部分。・・・そして銃っぽい何か。はい、新型でした。

神機から触手っぽいものが伸びて腕輪に接続されたが、そんな事

はもう俺の脳には入り込んで来なかった。

「おめでとう。君がこの支部初の、『新型』ゴッドイーターだ」

PSPソフト『GOD EATER』を最初からプレイした時に聞ける、シクザール支部長の台詞を耳にした時の俺の目は、恐らくレイプ目になっていた事だろう。

極東支部初の新型。つまり、俺はあの無茶苦茶な戦いの先頭に立って戦う事になるのだ。例えば、単独ウロヴォロスとか。

「適正試験はこれで終了だ。次は適合後のメディカルチェックが予定されている」

続けて何事かを言っている支部長の声は俺の耳には入っても脳には届かず、俺は剣を持ち上げたままただひたすらに今後の事を憂いていた。



## プロローグ ようこそクソッたれな世界へ（後書き）

新連載始めたけどきつと相変わらずの不定期連載です。

- 11/29 色々考えた結果こつそり年齢変更。15歳は若すぎた。
- ・

## 第1話 チュートリアル1

これからの戦いを考えて憂鬱になっている俺だったがいつまでも立ち尽くしている訳にもいかず、支部長の促したとおりに試験場を出る事にした。

試験場を出てロビーへ向かい辺りを軽く見回すと、原作通りにベシと、そこに座っているコウタが目に入った。

メインキャラの一人に初対面という本来ならば大騒ぎしそうな状況なのだが、今の俺にはそんな元気は存在していない。

・・・とりあえず死にたく無いので訓練は大真面目にやる事しよう。実戦と訓練は全然違っただろうが、それでも生き残る可能性は高くなる筈だ。

それと覚えている限りのバレットのレシピを何かにメモして、他の知識も同様に・・・くそっやる事が多すぎる。

「ねえ、ガム食べる？」

「ああ、ありがとう。貰うよ」

「あ、切れてた。今食べてるので最後だったみたい。ごめんごめん」

「お前今日からガムって呼ぶわ」

「根に持たれた!？」

こちらら今後の事で手一杯だったのに、そんな能天気な反応を顔を見せられたらイライラしてもしようがないだろう。

というかこれからメデイカルテックもあるというのに暢気にガムを食うとはどういう事なんだ。ゴッドイーター舐めてるのか。危機感が無いんだよこの野郎。

しかもこれで死亡フラグも量産しながら生き残れるんだから性質が悪い。俺なんて訓練前からいっばいっばいだったのに・・・!!

「あんたも適合者なの？」

「ああ」

「俺と同じか少し年上っばいけど、まあ一瞬とはいえ俺の方が先輩  
って事で、ヨロシク！」

「ああ、よろしくな。ガム」

「本当にそれで呼ぶの！？」

「まだ名前知らないから仕方ないだろ？」

そういえば、原作を思い出すとコウタって自己紹介してないんだ  
よな。他のキャラはムービーでちゃんと喋ってるのに。

「あ、そっか。俺は藤木コウタ。改めてヨロシク！」

「芹沢トウヤだ。よろしくな、ガム」

「紹介してもガム！？」

ちょっとからかい過ぎたのか、コウタは少し疲れてしまった様だ。  
しかしおかげで多少は気分がスッキリ出来た。次からはコウタと  
呼ぶ事にしよう。原作でも知っているが、こいつはいい奴だからな。  
こういう愉快で明るい友人は結構貴重だ。特に全体的に荒れてし  
まっているこの世界では、こんな真つ直ぐな奴はなかなか居ない。  
外部居住区で住んでいた時の近所の人間は殆どが表情に翳りがあ  
った。まだ幼い子供でも、両親を無くした等の様々な理由で暗かっ  
た程だ。

当の俺もその一人だった訳なんだがな。両親も死んで、更に原作  
をプレイしてるせいで今後の展開に不安を感じてたから仕方無いと  
いえば仕方の無い事だろうが。

暫くコウタと雑談していると、コツコツと靴音を立ててこちらに  
向かってくる白い服の女性が現れた。

ローレグのボトムス、太ももの部分には大きく切れ込みが入って

いて、それを紐で結んでいる。トップスのスーツはボタンなんか関係無いと言わんばかりに開いている。

兩宮ツバキ。元ゴッドイーターで、現在は教官として活躍してる女性だ。

しかしこのファッションは恥ずかしくもないだろうか。巨乳はよく溢れんばかりの胸だとか描写されるものだが、この人の場合はもう溢れたと描写してもいいくらいに見えてしまっている。

特別な構造をしているのかスーツが全くズレていないものの、何かが引つ掛かったらあつという間に胸部装甲が結合崩壊しそうだ。

こんなものを若い男達が多く居るここで着ているとは恐ろしい女性だ。俺は年上には全然興味が無いのでどうでもいいが、実際コウタは谷間に目を奪われてしまっている。

ドイツ語か何かでは生の事をエロスという様だが、まさか性欲を刺激して男達の性への、もとい生への渴望を刺激しているのだろうか。

もしそうなら俺にはまるで効果が無いので何とかして欲しい。今の俺の精神はタナトス一直線である。

「立て」

「はい」

「は、はい！」

一回目で経たないと怒鳴られた筈なのですがすぐに立つと、ボーっとしていたコウタもつられて立ち上がった。

コウタは何故か微妙に体を反らす様に起立しているが、俺の推測ではそうしないと谷間が視界に入って凝視してしまいかねないからだと思われる。

まったく青少年だ。

「これから予定が詰まっているので完結に話すぞ。私の名前は雨宮ツバキ。お前達の教練担当官だ」

そう前置きをしたツバキさんは上官らしい威厳とプレッシャーを含んだ声で説明を始めた。

「これからの予定はメディカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化・基本戦術の習得・各種兵装の扱い等のカリキュラムをこなしてもらおう」

基礎体力の強化は単純に体力トレーニングだろう。いくらオラクル細胞を摂取して超人的な能力を手に入れたとはいえ、基礎が大した事なければどうしようもない。

一応万が一アラガミに襲われた時を考えて普段からトレーニングしていたが、きっとそのトレーニングよりも過酷なものになるだろう。

基本戦術の習得と兵装の扱いは、恐らく原作のチュートリアルでやっていた様な事だろう。

ここから本格的にゴッドイーターとして重要な訓練になると思われる。知識上は色々知っているとはいえ、きちんと学ばないと死ぬ確立が上がりそうだ。

・・・しかし気になるのだが、訓練用の敵はいったい何なんだろうか。オラクル細胞で作っている訳では無いと思うので普通に生体兵器の様なものなんだろうか。

元々フェンリルは薬物に関する会社であり、かつゴッドイーターを生み出した会社なので不可能では無いと思うが・・・よくよく考えると結構恐ろしい。

「つまらない事で死にたくなければ、私の言う事には全てYESで

答える。いいな？」

「はい」

「は、はい！」

YESと返そうか迷ったものの、そんな事をすると殴られそうな気がしたのでやめておく。

ツバキさんは美人だが怖いな。いや、美人だからこそ怖いのか。

「さっそくメデイカルチェックを始めるぞ。まずはお前だ」

「はい」

一五 までにペイラー榊の研究室へ向かえという指示。こういう軍隊では何故普通に15時とか3時と言わないのかちよつと思議に思うが、まあ俺の知らないちゃんとした理由があるのだろう。

ともかく、その時間まで施設内を見て回れとの事だ。ロビー等の原作で映っていた部分はほぼ知り尽くしているものの、やはり所々違いがあるのでそれを見比べるのも楽しいかもしれない。

が、まずはよろず屋を確認するべきだろう。ゲームと同じ品揃えなのかどうかを確認しなければならない。もし後半で販売する商品などもあるならば俺の生存率の上昇に繋がるからだ。

特に回復薬系。個数制限がどういいう設定になってるか気になるのでそれも調べておかなければ。

「今日からお前達が世話になるフェンリル極東支部、通称アナグラだ。メンバーに挨拶の一つでもしておく様に」

そう言って、ツバキさんは身を翻して去っていった。

うむ、ケツがプリップリしている。蹴りたい背中ならぬ蹴りたい尻だ。実際に蹴ったら俺のアナグラ生活がとんでもない事になるだろうが。

「っはあく、緊張したあく」

「谷間に興奮してたくせに」

「いやだって仕方なくね？あれはヤバイって。トウヤも見てたんだる？」

「俺は年上に興味が無いからな。あと胸って大きければ良いって訳でも無いだろうに」

俺がそういつた瞬間、近くで会話をしていた銀髪の女性が何故かこちらに素早く振り返ったが気にしない事にする。

ああ、気にしない。アラガミとの戦いに喜びを見出すスナイパーみたいな人だった気がするけど気にしない。何度も言うが俺は年上は対象外なのだ。

「ともかく、時間までは挨拶周りでもするか。まずはよろず屋からだな」

「なんでよろず屋・・・」

「お前、よろず屋馬鹿にしてるのか！？」

「何で怒ってるの！？」

アーク計画実行中はおるか、夢の世界でもいつも通りに販売してくれるよろず屋なんだぞ！？

この世界ではどうかわからないけど、少なくともアーク計画の時はアナグラに居るだろう。それだけでこの人は評価出来る。

何よりゴッドイーターの生命線と言ってもいい程重要な店だ。原作無印ではどれだけお世話になった事か・・・

「まあいいや。じゃ、俺は行くわ」

「メデイカルチェック遅刻するなよー」

「お前がな」

さて、商品確認といきますか。期待してるぞよるぞ屋。



## 第1話 チュートリアル1（後書き）

サブタイトルは作中の台詞とミッション名にしよう。

そう思ってたらず話目で名前に困った。

とりあえず実践まではチュートリアルで行こう・・・

第2話 やあ、君が例の新人くんかい？（前書き）

華麗なあの方はまだ登場しません。

## 第2話 やあ、君が例の新人くんかい？

さて、コウタと別れて来たのは宣言通りによろず屋だ。

原作では少量の荷物を広げているだけのよろず屋だったが、実際はそれ以外にも商品が入っているとかわしきケースが複数倍に置いてある。

しかしそれでも商品に限りがあるのは確かだ。ゲームの様に回復薬の大量購入など不可能だろう。

何せこの世界は荒れ果てていて物資が少ないのだ。たとえ結構多く残っていたとしても、そんな買占めの様な行動は許されない筈だ。

「よう、新入りかい？」

「はい、これから頻繁に世話になりそうだから商品を見るついでに挨拶に来ました」

「ははっ、そうかい。新入りは大抵先輩達の方に先に挨拶に行くんだがな」

そりゃそうだ。先によろず屋に行く新人なんて俺以外にいたらビツクリする。

「先輩達に話を聞くのも重要ですけど、回復薬とかを仕入れるのはここになりそうですからね。生命線になりそうですし」

「それが理解出来るなら今後の活躍と売り上げに期待出来るそうだな。アラガミと渡り合うには配給と報酬じゃあまず足りないからな」

「そうでしょうね」

そんな会話をしながら商品を眺める。

どうやら回復系アイテムや初期のドーピング系アイテムはそれなりに揃っているようだ。回復柱やトラップ系やスタングレネードも

高価だが売っている。

しかし効果が高くなるにつれてやはり在庫が少なくなる様で、今はもう売れてしまったのか回復薬改が20個前後しか残っていない。恐らくまだケースの中に在庫はあると思うが。

「こういっうドーピング系統の薬って、改良で効果が高まったものとかは無いんですか？」

「ドーピング系とは面白い言い方だな。で、改良品はあるにはあるが、安定供給出来る様にフェンリルで研究中らしい。まだ成果は出ていないみたいでな、商品化したら仕入れるから楽しみにしててくれ」

「そうですか」

成る程、存在していても安定供給出来ない物があるのか。恐らく原作でいうアイテム合成で作る物がそれなんだろう。

もしかすると今は存在すら知られていないアイテムもあるのかもしれない。・・・それだと個人のアイテム合成はどんな仕組みになっているんだろうか。後で調べる必要があるそうさ。

装備の作成もバレットエディットもある。暇な時はとことんターミナルを弄ってみる必要があるかもしれない。

装備系やバレット系の商品は流石にむき出しにする訳にはいかず、目録だけが置いてある様だ。どうやら料金を払うと購入者の倉庫に送られるらしい。

倉庫の仕組みや武器の交換の仕組みも調べなくてはいけない。交換する度に整備が必要だとリツカちゃんの疲労がとんでもない事になりかねない。

原作では討伐対象に応じて武器を使い分けてたからな・・・同じ武器しか使わない他のキャラからすると異様な光景なのかもしれない。

何せ、形や重さ、性能が違う神機を何の問題も無く振り回すのだ。クレイモアとハンマーなんて重心の位置が違いすぎるだろうに。そう考えるとやはりプレイヤーは化け物だろう。そりゃ異例の出世も出来るだろうさ。ヴァジュラ四体と同時に戦って無傷で倒せる新兵なんて怖すぎる。

そのまま店を見た様子だと、制御パーツは序盤の数種類くらいしか売ってない様だ。一応よろず屋に聞いてみると、これ以上の物は個人で材料を集めて作るしかないらしい。

しかし強化パーツは店売り品が全て揃っていた。基準がわからない・・・が、まあ売っているんだからよしとしよう。

ちなみに、衣服も目録販売だった。どうやら初期選択の制服以外に普通の服も売っている様で、ゲームには無かった無地のTシャツ等があった。

しかしゲームで製造する服は無い。これもどうやら素材を集めて作らなければいけないらしい。一応金さえ払えばオーダーメイドで作ってくれるみたいだが。

そしてゲームには無かった商品群に目を向ける。といっても特別なアイテムがあるという訳では無い。単純に嗜好品を売っているだけで、それもガムやジュース程度だ。酒も売っているみたいだがやけに高い。

原作でリンドウさんの部屋にあった様な酒の瓶もある。配給ビールが無い時はここで買って飲んでたんだろう。

ちなみに味の程をよろず屋に聞いてみると、配給で貰えるビールと比べると全然らしい。何故よろず屋が配給ビールの味を知っているのか少し気になった。

「大体わかった。訓練が終わって頑張れる様だったらお世話になります」

「おう、頑張れよ。期待してるぜ！」

よろず屋見物が一段落したので最後に挨拶をして離れた。

さて、意外と商品確認に時間がかかった気がしたものの、まだメデイカルチェックの時間には程遠い。なのでまだ他を見る時間があった。

よろず屋も終わったから・・・そうだ、ミッション受注で世話になるヒバリちゃんもとても重要な人じゃないか。

どうやら今はタツミさんが居ないらしく普通に手元の端末で仕事をしているみたいなので、挨拶には丁度いいタイミングだろう。

じゃ、早速・・・

「貴方面面白いわね。最初に行くのがよろず屋なんて」

「はい？」

行こうとすると女性の声に話しかけられた。落ち着いていて、何処となく色気を感じる様な感じの声だ。

まさかと思い返事をしつつそちらを向くと、その先にはやはり銀髪の女性が笑みを浮かべて立っていた。先程物凄い勢いでこちらを振り返っていた女性だ。

左目の眼帯と大きく開いた胸元が目を惹く女性。しかし、こちらはツバキさんの様なグラマーな体型とは違い、スレンダーな体型だ。

「ジーナ・ディキンソンよ。貴方は？」

「あ、はい。芹沢トウヤです」

「トウヤ君ね。貴方には期待しているわ」

そういい残し、ジーナさんは俺から離れていった。

期待していると言われたが、その期待はゴツドイーターとしての期待だろうか。それとも・・・いや、この事は気にしない事にしよう。変な事は考えない方がいい。

ただ一つだけ言っておこう。ジーナさんは一応Aくらいはあった。何とは言わないが。

さて気を取り直してヒバリちゃんに挨拶へ行く事にした。多分同じくらいの歳なんだよな。

「先程はどうも。これからお世話になります。芹沢トウヤです」

「あ、はい。合格おめでとうございます！」

「ありがとうございます」

本音を言つと全然おめでたく無いし、ありがたくも無いのだが。

誰が好き好んでこんな命がいくらあっても足りない仕事を・・・と思つたが、原作を思い出すと意外と望んで仕事をしている人間が多い事に気付いた。

コウタは家族の為、ジーナさんは戦いを楽しむ為、あとカレルだっけか、金の為に働いてるのは。

「ミッション発注を管理するオペレーターの竹田ヒバリです。トウヤさんはまだミッションの受注は不可能ですが、実戦投入許可が降りた際はよろしく願いますね」

「はい、よろしく願います」

といった所で挨拶は終了。向こうも仕事がありそうだし、これ以上特に話す内容も無いのでさっさと次へ。

適当にその辺に居る原作で見なかった人物にも挨拶して回っていると、コウタがゲンさんと会話しているのが視界に入ってきた。

どうやら色々話を聞いている様なので、ゲンさんへの挨拶はまた

今度にしておくでしょう。

「あ、君って確か新型の人だよな」

「えっ？あ、はい」

そろそろメデイカルチェックへ向かおうかと思ってエレベーターへ向かうと丁度近くの階段を上って来たらしい女性に声をかけられた。

頭にゴーグルをつけた灰色タンクトップの女性。神機整備でお世話になり、BURSTシナリオでは微妙にヒロイ的な活躍をしていた楠リツカさんだ。

「はい、新人の芹沢トウヤです。ところで、もう新型だって話が広まってるんですか？」

「私は楠リツカだよ。新型の事はそれなりに広まってるけど、君だって事はまだ知らない人が多いんじゃないかな。私は技術部側の人間だから先に情報が来てただけ。」

「成る程」

そりや整備する側には新型使いの情報は行くわな。

「神機整備や製造関係で何かわからない事や相談したい事があったらターミナルからメールでも送ってね」

「はい、そうします。結構色々聞くとと思うんでお願いします」

「うん、どんどん聞いて。暇な時は一緒にメシでも食いながら教えるよ」

「楽しみにしてます」

じゃあねー、と手を振りながらリツカさんは去っていった。ううむ、フレンドリー。あれはモテるな。友人も多そうだ。



しかし原作では全然気にしてなかったけど、俺とかコウタとかつてもしかして極東支部でかなり若いんじゃないのか？

リツカさんは同じくらいだと思うけど、殆どの人が年上っぽいし・・・くそっ俺は年上なんてせいぜい1歳差くらいまでしか守備範囲に入ってる無いらしいのに。このままだとアリサとリツカさんとヒバリちゃんしか居ないんじゃないかなろうか。・・・十分か。

でも後輩のアネットにも期待しよう。年齢は覚えてないが後輩なんだから年下、もしくは同じ年くらいだろう。多分。

そしてよく考えたら別に恋愛がしたい訳でも無い事に気付いた。どうでもいいや。メディカルチェック行こう。

エレベーターでラボラトリの階へ移動する。明らかに原作よりも人が多いので誰か乗ってるかと思いきや誰も乗っていなかった。だからどうしたという事もないのだが。

ラボラトリの階に到着するとエレベーターの扉が開いた。一步出て見回すと、原作とは違い左右に他の場所へ向かう通路がある事に気付いた。

まあ当たり前だろう。原作程度の部屋数しか無かったらどう考えてもおかしい。もっと広げるよと突っ込みをいれなければいけないってしてしまう。

・・・しかし、今の俺はそんな事より重要な存在に気を取られていた。

自販機の前で何を飲もうか悩んでいる女性。ピンクという謎な髪色で、みつ編みの髪をカチューシャの様にしている。

服装は緑色のワンピースで、丈夫そうな生地で出来ている。確か

スタッフ曰く、（鉄塔の）森ガールだったか。わかる様なわからない様な。

・・・そう、戦闘になると性格が変わると話題の通称『誤射姫』、台場カノンちゃんである。

正直今までで一番嬉しい原作キャラとの出会いだったりする。この娘の誤射には幾度と無く吹き飛ばされたが、それでもお気に入りだったキャラだ。

実際にゴッドイーターとなった今では誤射が怖いので出来るだけ一緒にミッションには行きたく無いが、それでも仲良くなりたいものだ。ミッションには行きたく無いが。

大事な事なので二回言った。あ、でもあの二重人格をこの目で見たいので一回は行きたいかもしれない。

「こんにちは」

「ふえ？あ、はい！こんにちは」

前世でも今世でも、リアルにふえ？って言う人初めて見たぞ。すげえ。

「新人の芹沢トウヤです。これからよろしく願います」

「あ、はい。新人さんですね！確か二人来るって誰かが言ってたっけ・・・私は台場カノンです。よろしく願いますねっ！」

「はい」

凄いな・・・原作でもそうだったけど、まるで年上に見えない。同年代くらいに感じるぞ。

「ラボラトリに来たって事は、これからメディカルチェックですか？」

「はい。サカキ博士の研究室ってどこでしょうか？」  
「サカキ博士のラボはその廊下の突き当たりですよ」

どうやらエレベーター前の通路の一番奥というのは変わってないらしい。これなら迷う事もないので助かる。

しかしそれだと横の通路は何処へ通じるんだろうか。ラボラトリ階だから研究関連の施設だろうが・・・実験関連はここでやってるのかもしれないな。

「ありがとうございます。まだ当分先だと思えますが、一緒にミッションに行く機械があればよろしくお願いします」

「はい！訓練頑張ってくださいね！」

カノンちゃんは顔の横で右手を振って送ってくれた。・・・ダメだ、まだ裏カノンを見ていない俺にはカノンちゃんをさん付けで呼ぶ事が難しい。

ゲームで知ってるとはいえ、あの人が「断末魔素敵だったよ！」とか言うんだよな。全然信じられない。

まあその事は後々一緒にミッションに行つて確認すればいいだけの事だ。今はさっさとメデイカルチェックを終わらせてしまおう。

そして俺は、ラボの扉をノックして開いた。

**第2話 やあ、君が例の新人くんかい？（後書き）**

それなりに細かく行動を描写すると話が全然進まない事に気付いた。

11/29 こっさり年齢変更したので一部文章を変更。17歳に  
しただけで一気に守備範囲対象者が増えてやんの。

### 第3話 チュートリアル2（前書き）

年齢設定を15歳から17歳に変更しました。

### 第3話 チュートリアル2

ラボの中には二人の男性が存在していた。

一人は大きな端末をカタカタと操作しているゆったりとした服の人で、もう一人は端末の横に立っている白いコートの様なスーツを着た人だ。

そう、シナリオ中僅か数回しか目を開かないサカキ博士と、無印のラスボスであるシックザール支部長だ。

「ふむ、予想より129秒も早い。・・・よく来たね、新型君」

(あ、原作よりも時間が近くなってる)

どうでもいい所で原作と違う展開にしまったが、まさしくどうでもいい事なので気にしない事にした。

「私はペイラー・サカキ。アラガミ技術開発の統括責任者だ。以後君とはよく顔を合わせる事になると思うけど、よろしく頼むよ」

「芹沢トウヤです。こちらこそよろしく願います」

しかし若い。実際は中年のおっさんと言っていい年齢の筈なんだが、この外見の若さはどうなっているんだろうか。

まさか変若水を摂取しているのか？確かお肌に良いみたいな説明だった気がするが。・・・あり得そうだから嫌だな。こいつら二人とも研究者だし。

「さて、見ての通りまだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

「・・・サカキ博士。そろそろ公私のけじめを覚えて頂きたい」

溜息を溢しながらサカキ博士に苦言を呈している支部長だが、博士はまるで話を聞いていない様子だ。いや、聞いていてスルーしているの間違いか。

それを支部長も理解している様で、一度注意するとすぐこちらを向いた。・・・しかしこいつもイケメンだな。

「適合テストではご苦労だった。私はヨハネス・フォン・シッケザール。この地域のフェンリル支部を統括している」  
「芹沢トウヤです」

君には期待しているよ、と言われたが、正直全部知ってしまったている身としては何とも言えない。

とはいえ、この時期ならば普通にゴッドイーターとしての期待だと思われるので、素直に期待を受け取っておこう。

「彼も元技術屋なんだよ。ヨハンも『新型』のメディカルチェックに興味津々なんだよね？」

「貴方が居るから技術屋を廃業する事にしたんだ。自覚したまえ」  
「本当に廃業しちゃったのかい？」

「ふっ・・・」

お前等のそのやりとりは何なんだよ。こっちも全部知ってるから反応に困るだろうが。

ちなみに表情には一切出していない。目の前にアラガミが迫っている等のあからさまにヤバイ状況にでもならない限り、俺のポーカーフェイスを看破するのはきつと不可能だろう。

前世で仲間内とやった賭けポーカーで無双を誇っていた頃の俺の特技は、今世にも受け継がれているのだ。今まで使う機会が無かったが。

・・・そういえばスキル『大吉』はギャンブルにも効果があるん

だろうか。機会があればコウタにギャンブルで勝負を挑んで試してみるか。

コウタは弱そうだからカモれるだろう。

「さて、ここからが本題だ。我々フェンリルの目標を改めて説明しよう」

俺が配属されるのは第一部隊。つまりは極東地域一帯のアラガミの撃退と素材の回収を主にする部隊だ。簡単に言うならば、居住区が襲われる前にアラガミを襲え、といった感じだろう。

その部隊の特徴から強力なアラガミや複数のアラガミと戦う事が多いが、その分回収したアラガミの素材も多くなるので報酬が多く、そしてその素材のおかげで対アラガミ装甲壁等の研究もしやすくなる。

つまりは一番危険で、かつ一番重要な部隊という事だ。ベテランのリンドウとソーマと一緒に配属されている事を考えると簡単に納得できる。

「じ、この数値は・・・！」  
(博士うるせえ)

さて、回収した素材は研究にも使われるが、それと同時に『エイジス計画』を成就する為の資源にもなる。・・・と、目の前のイケメン支部長は言った。

そのまま支部長はエイジス計画について長々と説明しているが、そんなものが存在していない事を既に知っている俺には正直どうでもいい話だ。

故に俺の興味は支部長の演技力に向いている。流石に年の功というか何というか、真実を知らなければ信じきてしまいそうな程の演技力だ。



頭も良くて演技も得意か。しかも社会的地位もあるから金もあるだろう。勝ち組過ぎる。あ、最終的に死ぬから負け組なのか？

「凄い！これが新型か！」

「ペイラー、説明の邪魔だ」

「ああ、ゴメンゴメン！ちよつと予想外の数値で舞い上がったちゃったんだ！」

確か主人公は適合率が高いんだったか。ゲームではこの適合率の高さにあまり意味は無かったけれど、この世界ではどんな感じになるんだろうか。

適合率が高いほど能力が高くなるというのなら生存率が上がるから喜ばしいんだが・・・

「ともあえ、人類の未来の為だ。尽力してくれ」

「はい」

「じゃあ私は失礼するよ。・・・ペイラー、終わったらデータを送っておいてくれ」

「わかってるよ」

そして支部長はラボから出て行った。

しかし、新型のメデイカルチップに興味津々と言っていたが、オオグルマからアリサの情報を聞いていないんだらうか？

と思つてすぐに考えを改めた。今のアリサって確か精神が不安定な上に催眠かかっているもんな。普通の新型の情報は俺が初めてなのかもしれない。

まあ俺は転生者だから普通とは言いがたいんだが。

「よし、準備は完了だ。そこのベッドに横になって」

「はい」

「少しの間眠くなるだろうが、メディカルチェックが終わればすぐに目が覚めるから心配しないでいいよ。これが終われば今日はもうやる事は無いからね」

どうやらゲームの様に勝手に自室に送られるなんて事は無い様だ。それもそうだ。まだ部屋の案内もされていないからな。

「戦士の束の間の休息というやつだね。メディカルチェックにかかる時間は予定では10800秒だ。ゆっくりおやすみ」

「はい」

そして何やら様々な計測器を取り付けられ、よくわからないものを注射されたりすると急速に眠気が襲ってきた。

特に抗う理由も無いので、俺はそのまま意識を眠りに落とした。

女性ゴッドイーターの場合、寝ている間に何か変な事されないか不安にならないんだろうか・・・等と考えながら。

目を覚ますと、次にメディカルチェックを受けるコウタが既にラボへと到着していた。

「目が覚めた様だね。お疲れ様」

「はい」

とりあえずこれでメディカルチェックは終わりの様なので、後は自室に行つてのんびりするだけだが・・・そういえば部屋知らないな俺。

「おはよ。はい」

「ああ、おはよ・・・何だこれ、鍵と紙？」

「トウヤの部屋番号と鍵だよ。ツバキさんに渡しておいてくれって言われたんだよ」

「そっか。ありがとな」

部屋番号を見ると111号室だった。原作と同じ場所が自室になるなら分かりやすく助かるが、111号室だと微妙だな。ぞろ目でちょっと嬉しいから嫌では無いが。

ちなみにコウタは110号室らしい。同期でお隣さんだから、ミツシヨン以外でも色々和交流がありそうだな。

しかし原作だとシナリオ進行以外ではバガラーの話しかしてなかった気がする。まさか本当にバガラーの話しかしないという事は無いよな？

さて、ラボから出てエレベーターに乗り、居住区画へとやってきた。案内を見ると、なんと111号室はエレベーターから真っ直ぐ進んだ一番先の部屋らしい。どうやら原作と同じ部屋の様だ。

しかし、やはり原作の様に三部屋しか無いという訳ではない。一番奥に行くまでいくつか部屋が存在しているし、エレベーターを降りて左右に伸びる通路もある。

そんな造りなせいか、自室まで意外と長い距離を歩かなければならなかったりする。とはいえ、あくまで原作と比べて長いというだけなのだ。

「おお、意外といい部屋」

自室の鍵を開けて入ると目に入ってきたのは、まあ原作と同じ様な特に飾り気の無い殺風景な部屋だ。

しかし備え付けの家具はやや古いものの、外部居住区で暮らしていた今までのものより良い。しかもソファとベッドがあるのだ。

今までは座布団と布団だったのでこれは正直物凄く嬉しい。布団は嫌いじゃないが、ベッドの方が個人的には好きなのだ。

とりあえずソファアに座ったりベッドの感触を堪能した俺は、早速荷解きを始めた。といつても、大した量では無いのですぐに終わるだろう。

何せ着替えや両親の写真と形見、こまごまとした小物程度しかないのだ。他の物は近所の人達に渡したのでこれが今の俺の全財産。

詳しい程は知らないがゴッドイーターは高給取りなので、他に必要な物があつても後で買い揃えればいいだろう。稼ぐ間も無く死んだらそれまでの話だ。絶対に死ぬ気は無いが。

「これで荷解きは終わりだな。・・・さて、本日のメインといくか」

荷解きが終わった俺が目に向けた先には、大きな機械。そう、ターミナルだ。

実は自室に入った時から気になって気になって仕方が無かったんだが、落ち着いてゆっくりじっくり調べ尽くす為に先にやるべき事を終わらせたのだ。

何せこのターミナルはゴッドイーターにとって必要不可欠なものであり、そしてゲームと現実の違いを最も感じられるだろうものだからだ。

ロビーにも数台設置してあったが、そこは詳しく見る事が出来なかったしな。

ターミナルの前に立って見てみると、少ない項目が画面に表示されていた。

ただの情報端末として使うだけならこのままで大丈夫みただが、アイテム倉庫やデータベース等のゴッドイーターとしての行動に関する項目は腕輪認証が必要な様だ。

腕輪無しで出来るのは通信と一般公開されてる映像や情報の閲覧、アナグラ内の施設案内、そして外部記憶メモリの使用等だ。ちなみにバガラリーを探してみたら一般公開されていた。

この世界の過去のテレビ番組を漁ってみるのも面白いかもしれないが、それはまた今度にしておく事にして、今は腕輪認証した後確認出来る項目について調べよう。

ターミナルのモニター横にある認証装置に右腕を通す。すると画面に認証中という文字が表示された後にNORNというロゴマークが表示され、いくつかの項目が表示された。

恐らくゴッドイーターの関わる部分のオペレーティングシステムがノルンという名前なんだろう。ちなみに、画面の上部にはノルンの名前と俺の名前も表示されている。

並んでいる項目は『個人倉庫』『神機整備』『バレットプログラム』『データベース』等がある。他にもいくら項目が存在するが、主なものはこの四つだろう。

「・・・ん？」

どの項目から調べようかと思っていた俺の目に、何やら不可解な映った。

ターミナルのモニターに並んでいる複数の項目、そのどれを選ぶか手元のキーボードでカーソルを動かしていると、一瞬カーソルが消えるのだ。

ただの見間違いかもしれないが、妙に気になったのでゆっくり一項目ずつ、確認する様にカーソルを動かしていく。

・・・そして、その原因が判明した。

「なんだ、これ・・・？」

モニターの右下隅、そこにある背景にまぎれそうな四角形。そこにカーソルは移動していた。

どう考えてもおかしい。わざわざこんな場所に隠し項目を作る理由など無いだろう。という事は普通なら無い筈のものと考えるべきだろう。・・・ターミナルのデバッグ用だったりするんだろうか？

ともかく怪しすぎて気になる項目だ。文字で説明してあれば楽だったが書いてあるのはただの四角形なのだから、選択して見るまではどんなものかわからないだろう。

「よし、じゃあこれから見てみるか」

最初に見る項目をこの謎の項目に決めた俺は、少し緊張しながらもカーソルを四角形に移動させ、そして選択した。

途端、パツと素早く切り替わる画面。背景の画像も変わらず、上部にあるノルンのロゴと俺の名前も変わらない。

・・・しかしそれ以外の場所、画面中央付近には予想外なものが、予想出来る筈が無いとんでもないものが表示されていた。

「はっ?・・・えつまジで?どういう事?」

混乱している俺の顔を僅かに液晶に写しながら、ターミナルは沈黙を保っていた。

・・・『転生特典データベース』という文字と、いくつかの項目を表示したまま。

### 第3話 チュートリアル2（後書き）

ここから情報チート主人公が始まります。そこまで異常なものはありませんが。

・・・でもこの世界からすると異常かも知れない。

#### 第4話 ノルンのデータベース(前書き)

今回のサブタイトルは、サカキの台詞の一部です。多分。

「ノルンのデータベースを参照して〜」って感じの台詞がありましたよね？



## 第4話 ノルンのデータベース

「転生特典って・・・何これ、もしかして記憶が無いだけで神様転生だったりののか？」

あまりに非現実的すぎる展開に思わず混乱してしまう。が、少し冷静になると、既に転生という非現実的な体験を済ませているのであり得ないことでは無いのだろうかとも思える。

どれだけ記憶を探ってみても、神様転生だとかそういったイベントに遭遇した覚えは無い。しかし、現に転生して特典？の存在をこの目で見ってしまったので、そういうものだとな納得するしか無いだろう。

ともかく転生特典である。転生特典データベースと書いてあるので恐らく情報関係だろう。

並んでいる項目は『装備データ』『アラガミデータ』『バレットデータ』『素材データ』『その他』の五つ。

ともかくどんなものなのか確認しなければならぬ。何せこの情報次第では俺の生存率が大きく上がる可能性があるのだ。

それに転生特典というくらいなのだから、チートと言ってもいいくらいの情報でなければそれらしくないだろう。

「そう思ってた結果がコレか・・・」

しかし現実はそのままで優しくは無かった。

『装備データ』『アラガミデータ』『素材データ』は、攻略wikiにある様な情報だったのだ。便利といえば便利だが、この程度の情報なら普通にフェンリルでも持っていそうなものだ。

『バレットデータ』はゲームのバレットエディットと全く同じだ

った。違うのは料金が無料なだけで、後は同じだった。俺がゲームで作ったバレットもあつたのは少し嬉しかったが。

『その他データ』原作クリア後のターミナル機能が見られるだけだった。原作のムービーが見れるのは原作知識が薄れてきている事を考えると結構助かるが、所詮それだけだ。

・・・つまり、正直言つて期待外れと思つてもいい情報だったのだ。

「はあ、まあ多少は便利ではあるけどなあ。もうちよつと何とかならなかつたのかよ、このガツカリ特典は」

今の俺は特典に期待していた時と比べてかなりテンションが下がっている。例えるなら、原作BURSTで戦々恐々としながら戦つたハガンコンゴウが墮天種よりも弱かつた時くらいにはガツカリしている。

この向ける先の無い何ともいえない感情の矛先を何処へ刺し向ければいいのか。くそっアラガミでも殺してストレス発散してえ。まだ実戦した事無いが。

ローテンションのままターミナルを操作して普通の画面へと戻した。特典の事は忘れて、ターミナルの仕組みや普通の項目を確認する為だ。

まずは・・・順番に個人倉庫からだ。

「うん、まあ何も無いから確認してもしようがないけどな」

俺が言つた通り、倉庫を使用していないので目録は空だ。しかし、この倉庫がどんなものかはヘルプを見て理解出来た。

どうやらこの倉庫は、主にアラガミ素材等のそのまま放置出来ない様な物やアイテム製造に使う素材を保管しておく為のものらしい。

原作では回復剤等も倉庫へ送る事が出来たが、ここではそういった  
ア危険の無い消耗品は自室管理の様だ。

素材はミツシヨンから帰還した際に担当の部署へ持って行き、そ  
こで預けるか売却するかの手続きを行うらしい。預けた場合は個人  
倉庫の情報更新もそこですぐ行われる様だ。

『個人倉庫』の項目ではアイテム合成も出来る様だ。が、当たり  
前だがゲームの様にはいかない。

実際に作るのは研究部署であり、必要素材を研究部署に渡す事で  
完成品を倉庫に送られるか新たに製造されるらしい。

勿論研究が進まなければ効果の高いものはそう簡単に作れないし、  
安定生産が出来ないものならば要求される素材も多くなり価格も高  
くなる。稀少な素材なら研究が進んでいないので成功するかどうか  
も難しい。

つまりは有料ではあるが素材を用いた物々交換の様なシステムら  
しい。今はどんな物が作れるのか調べてみたものの、原作序盤から  
中盤にかけてのものしか無い様だ。

今後の研究次第では生産出来る物も増えると思うが、とりあえず  
今はこんなものなんだろう。

・・・特典データベースの『素材データ』を活用したら稀少素材  
を集めやすいだろうし、それをフェンリルに売れば金儲け出来るし  
研究開発も進むかもしれないな。

転生特典データの使い道が出来て良かった。

「次は神機整備か・・・アイテム製造の仕組みを見たからなんと  
な想像はつくけどな」

『神機整備』の項目は、そのまま神機の整備と製造に関するもの  
らしい。

今の俺の神機のデータは刀身・銃身・装甲・強化パーツが『未接続』だった。かろうじて制御ユニットはプロトタイプだったが、それって神機でも何でも無いんじゃないかと思った俺はおかしく無いはずだ。

そこで調べてみた所、新型神機はあくまで基幹部のみのものらしい。つまり、各パーツを取り付ける部分と持ち手、そして内部機構のみという事だ。

捕喰形態は神機の基幹部だけでも可能らしいが・・・まあ戦うならきちんと刀身とかを接続しなければいけないだろう。当たり前な事だ。

ちなみに制御ユニットの仕組みを調べてみた。どうやら制御ユニットは捕喰して得た膨大なオラクルブースト、つまりバースト時のオラクル放出を制御して能力強化を行うものの様だ。

制御ユニット今はそこまで多くの物は開発されていない様だが、これもそのうち増えていく事だろう。

さて、『神機整備』で俺にとって最も重要なものが、各パーツの製造方法と交換方法だ。

どうやら製造はアイテムと同じく、注文をして素材と料金を提供し製造してもらう様だ。こちらはアイテムよりも研究が進んでいるらしくほぼ失敗は無い様だが、やはり製造には時間がかかるらしい。書いてある通りならば最短で一日、最長で一週間らしい。ここに勤めているゴッドイーター達がみんな製造を依頼していると、製造や整備担当の人達の疲労はとてつもないものだろう。頑張れりツカさん。

それはさておき・・・刀身等の交換も整備班に注文を出しておく仕組みらしい。交換自体は特に難しいものでは無いのですが、終わる様だ。だからといってゲームの様に何度も注文を出す訳にはいかなさうだ。

ちなみにこの項目でスキルについても少し判明した。どうやらスキルは、各パーツの製造に使った素材の力を神機に接続する事で開放したものの様だ。

しかしスキルは未だ詳しい事が判明していないらしく、明らかに効果のあるものしか確認されていないらしい。確かにユーバーセンスや消音なんかだとわかりやすいだろう。

しかし効果のわかりにくいものに関しては個人の感覚でしか判断出来ず、『体力があがったかも』『不器用になった気がする』『リンクエイドの調子が良い』といった曖昧なものが多い様だ。

おそらく体力上昇・不器用・名医辺りだと思うが・・・成る程、ゲームと違って詳しい効果がわからないのか。

そしてそれとは別に、オラクル細胞と適合してゴッドイーターになると何らかのスキルを持つ事もあるらしい。これはどうやら個人の性格や特技なんかが関係しているとしたか判明してないらしいが・・・コウタの自己犠牲とか、リンドウさんのカリスマとかの事だろうか？

・・・あれ、もしかしてスキル詳細や装備に付いてるスキルが全部わかる転生特典データベースって、物凄いものなんじゃないか？

「つ、次はバレットプログラムか」

項目を選んでみたが、どうやらバレット作成しか出来ない様だ。ただ作るだけなので試射は出来ず、試射をする為には訓練施設へ行かなければならない様だ。

どうやら訓練施設にもターミナルはあるらしいので、バレットエディットはそつちで作った方が良さそう。

・・・しかし、試射する為には一度仮完成品にしなければならぬらしく、試射して改善してを繰り返すと安いとはいえ結構キツイ

かも知れない。

それにバレットが完成したら今度は仮ではなくきちんと完成品にしなければならぬらしく、きちんとそういった処理をしないと実戦で不備が起こる可能性もあるらしい。

価格は全体的には原作よりも少なく済むみたいだが、どちらにしろバレットエディットは金がかかる様だ。

・・・ゲームと同じ様に試射をターミナルで出来る転生特典は実に素晴らしいものだという事がわかった。誰だよガツカリ特典だなんて言った奴は。

ちなみに色々調べた所、バレットはチップに登録された命令に乗っ取ってオラクルを発射するというものらしい。

属性の変換・特殊な軌道・ホーミングや貫通等のプログラムを組み込むチップは大活躍だが、構造的要因で64個しかバレットに取り付けられないらしい。ここは原作と同じの様だ。今後研究が進んだらもっと取り付けられる様になるかもしれないので期待しよう。

あ、ちなみに装飾弾も存在した。娯楽用なんだろうか。

「よし、次はデータベースだな」

データベースは基本的にゲームと同じ様なものらしい。一応メールを確認してみたが、まだ一通も存在していなかった。

どうやらこのメールは、アナグラで勤務している人間にならアドレスを知らなくてもそのままメールの送信が可能らしい。ゲームでいきなりメールが来ていたのはそういう事なんだろう。

ちなみにアナグラ勤務ではない人にメールを送るにはアドレスが必要な様だ。それと、ちゃんとアドレスを使ってメールをした方が色々都合がいいらしい。

仲良くなったらアドレスを交換しておけば問題は無さそうだ。多

分。

さて、それ以外のデータを見てみたが・・・何というか、情報がかなり穴だらけなものが多かった。

まず『スキル』は前述した通り判明しているものが少ない。状態変化の詳細情報とバレットの仕組み等は多分原作と同じだった。人物データは階級や功績程度であり詳しくは無いが、おおむね原作と似た様なものだろう。全然違うのは『アラガミ』『回収素材』『その他』の三種類だ。

まず、アラガミは原作で言う難易度6までのアラガミくらいしか載っていない。勿論アルダノーヴァは載っていない。

ポセイドンやスサノオが乗っているのにはちよつとだけ驚いたが、それ以降のアラガミは全然情報が無い様だ。むしろ発見すらされていない可能性もある。

そして肝心なアラガミのデータだが・・・オウガテイルからヴァジュラやクアドリガ等の一般的？なアラガミは情報が多い様で弱点や攻撃パターン等も詳しく載っている。が、墮天種になると一気に情報が少なくなる。

明らかに弱点のわかるアラガミは問題無いが、ディアウス・ピターやスサノオ等の上位のアラガミになると、攻撃パターンくらいしか情報しか無い様だ。弱点なんて『神が効くという噂』くらいだ。どの剣が有効かなんて一切無い。

確かに原作の様に一度討伐したアラガミの弱点がすぐに判明するのはおかしいが、ここまで情報が無いと今後が不安で仕方が無い。俺が順次実戦で確かめたと称して情報を渡すべきだろうか。

次に回収素材のデータだが、これに関してはむしろ原作よりも良くなっている。

どの地域で何が採取出来るかとう情報と共に、植物や稀少素材等

は写真付きで紹介しているのだ。これならちゃんと覚えていけば見逃さずに採取出来るだろう。

それにしても・・・この写真を見る限り、変若水等の固体ではない素材は瓶か何かを持っていかないかと採取が難しそうだ。もしかしたら何か方法があるのかもかもしれないので、今度ツバキさんに聞いてみようと思う。

最後にその他の情報。これに関しては基本的な語句や簡単な知識等が纏められている。というか情報量が凄まじく、知りたい単語を検索するというのが正しい使い方だと思われる。

一般的な情報等も多く収録している為、その他というか、辞典とかGoogleか何かの間違いじゃないんかと思った程だ。勿論、アクセス権限が必要な情報は見られない様だが。

・・・さて、アラガミの情報やスキルの情報、そして人物情報やその他の原作クリア後しか見られない様な極秘情報までも網羅している転生特典データベースは、いったいどれだけの価値があるんだろうか。

これだけの情報量があれば、何も知らずにゴッドイーターとして戦うよりもかなり生存率が高くなると思う。

誰がくれた特典なのかは全くわからないが、もし出会えたならば本気で感謝したい程だ。

「あれ、もうこんな時間か」

暫くターミナルを弄り回していると、結構時間が経過している事に気付いた。時間に気付くと急速に腹が減ってきたぞ・・・

確か食事は配給品が食堂で食べられる筈だったな。恐らく噂ので



かいトウモロコシが出てくるのだろう。ちょっとだけ楽しみだったりする。

この時間ならコウタもメディカルチェックが終わってる筈だし、誘って一緒にメシ食いに行くでしょう。

さて、明日からはゴッドイーターの訓練だ・・・

#### 第4話 ノルンのデータベース（後書き）

さて、情報チート主人公となった主人公です。

でも実戦がダメだとすぐ死んで終わりなので訓練はサボれません。

そろそろ更新に時間がかかり始めるかもしれません。

その際は気長にのんびりお待ちください。

第5話 チュートリアル3 (前書き)

まだ悪鬼の尾にすら到達していない・・・

## 第5話 チュートリアル3

朝である。アナグラ生活初めての朝である。

朝という事はつまり、今日から訓練が始まるという事だ。恐らく基礎訓練だとは思いますが、原作ではその辺りの描写が全然されていなかったなので弱体化不安だったりする。

というかアラガミに関する知識は任務をこなしながら勉強してた気がする。もしかして、意外と早く実戦投入されるのか？

「まあ考えても仕方ないか・・・あれ？おお？」

ともかく着替えようと体を起こしベッドから出ようとすると、体が妙に軽い事に気が付いた。いや、軽いというか力が有り余ってるというか・・・もしかして体中にオラクル細胞が定着したとか、そんな感じだろうか。

ともかく物凄く体の調子が良い。軽くジャンプしてみたら想像していたよりも高く飛び上がる事が出来た。

・・・これは基礎体力の強化とか必要無いんじゃないだろうか。今のままでもかなり動き回れそうで、自慢の足の速さとスタミナもとんでもないレベルになってそうな気がしてきた。オリンピックくらい目じゃないぜ。

そんな事はさておき、俺はさっさと着替える事にした。昨日晩飯の後に聞いた通達だと、そろそろ部屋を出て訓練場へ向かった方がいい筈だ。

初訓練で遅刻なんてするとツバキさんに精神的に殺されそうな気がする。鉄骨でオウガテイルを串刺しにする様な人に威圧なんてされたくないぞ俺は。

・・・コウタは遅刻しないだろうか？

さて、早朝訓練の為に訓練場へとやってきた。コウタも俺の後にすぐ来たので遅刻では無い。

「さて、まずお前達には神機の扱いに慣れてもらう。基本的に基礎訓練は神機を使いながら行う事になっているからそのつもりでいろ」「はい！」

「よろしい。まずはコウタ。お前の神機はこの銃型神機『モウスイブロウ』だ。かつて私が使っていた神機だから、基礎的な扱い以外でもアドバイス出来る筈だ。遠慮無く質問してくれ」「モウスイブロウ・・・」

どうやらコウタの神機は原作通りの様だ。前の使用者が訓練を担当するなら心強いだろうな。

最も、今のコウタは自分の神機に夢中の様だが。

「次にトウヤの神機だが・・・新型は極東支部では初めてでな、旧型と新型では互換性が無いらしい。今は一時的に間に合わせのものと組み立ててあるが、後でそれぞれの種類のパーツを支部から提供させてもらう」

「提供ですか？」

「ああ。刀身・銃身・装甲が各三種類ずつだ。最も簡単に作れるものしか提供出来ないが、それで自分に合った組み合わせを探してくれ」

「了解しました」

どうやら原作の様に初期装備は貰えるらしい。まあ、そりやせつかく現れた新型が装備不足で死んだら困るだろうしな。そもそも極東初の新型らしいし。

しかしどうせなら初期装備じゃなくて少しぐらいランク高いもの

をくれても良い様な気がするんだが・・・他の旧型なんてみんなフルチューンじゃないかよ。

仕方無いのはわかっているんだけどな。

さて、気を取り直して俺の神機を確認する。どうやら今回の装備はロング・アサルト・シールドの様だ。まあ基本だろう。

出来れば俺の足の速さを活かせる様にショートとバックラーが良かったが、それはまた今度パーツを貰った時にしよう。今はどうしようもない。

「よし、では神機を持って。神機と腕輪が接続されるだろうが、慌てるなよ」

指示通りに俺とコウタは自分の神機を手にし、それを持ち上げた。すると神機の基幹部から触手の様なものが出てきて、それが右手の腕輪へと接続される。

そういえば適合試験の時も同じ事が起きていた様な気がする。試験の時は今後の事を考えていたせいで全然気にしていなかったな。

「これで神機とお前達は繋がった訳だ。もし神機に何らかのスキルがあればその効果を感じられるだろうが・・・コウタ、何か感じるか？」

「あ、はい。何か、体の中にあるエネルギー？が増えた様な気がします。さっきまではそれにも気付かなかったんですけど」

「それがその神機のスキルだ。体内の最大オラクル保有量が増えるというものでな。オラクルを多く消費する銃型神機使いにはかなり役立つものだ」

「へえー」

まあ俺の神機にはスキルは特に無さそうだから関係無い話だがな。

「ちなみにトウヤの装甲には敵アラガミの補足を補助するスキルが付いているらしい。といっても、アラガミの放つオラクル反応を普段より長く察知出来る程度らしいがな」

「と思っただらどうやらスキルがあつた様だ。内容から察するに、補足時間上昇か何かだろう。何だったかなそのシールド・・・後で調べてみるか。」

「さて、まずは基礎体力の強化だ。神機を持ったまま訓練場を・・・そうだな、まずは全力で10周してもらおう。勿論神機は持つだけではなく、実戦の様に構えながらだ」  
「全力で10周も!？」

「全力で10周とはいきなり凄いな。でも、今の身体能力が俺なら簡単に行けそうな気がする。」

「それはコウタも同じ筈だと思つてたが・・・まあ確かに数字の上ではかなりキツそうだから、この反応でも仕方が無いのか？」

「それでは始める!」

「了解!」

「りよ、了解!」

「で、10周走つた訳だが。」

「トウヤ、お前全然疲れていない様だな」

「ま、マジかよ、俺、もうダメ、なのに・・・」

「いえ、一応汗が出て息が軽く乱れる程度には疲れています」

そう、全然余裕だった。いったい俺どうなっちゃったんだろう。足の速さとスタミナに自信があったとはいえ、ここまででは無かったんだが。

同じゴッドイーターになった筈のコウタは今は動けなくなってるし・・・どういう事だ？

「ふむ、どうやら相当偏食因子との適合率が高い様だな」「適合率、ですか？」

ツバキさんの話によると、適合率の高い人間は体内にオラクル細胞を取り込んだ時の強化度合いも高くなるらしい。ここまで始めから能力が高いのは見た事が無いとの事だが、新型故の何かがあるのかもしれない。

それともう一つ考えられるのは、俺の走りがスキルとっていいレベルにまで高まっている可能性らしい。昨日ターミナルで確認した時に知った、神機ではなく個人が持つスキルの事だろう。

俺の場合はスタミナと足の速さが上がってるから、アスリートと・・・鈍足の反対という事で、俊足か？

「しかし適合率が高いと神機の本能に精神が引き摺られる事があるようだからな。見た所問題は無いようだが、注意しておけ」

(絶対カノンちゃんの事だ・・・)

ともかく、俺は体力強化の必要が無くなってしまったらしい。という訳でコウタはそのまましばらく体力強化で、俺は次の訓練へと移る事になった。

「とはいえ、まだ神機に慣れていないからな。早朝訓練が終わるまで暫く体を自由に動かしながら神機に慣れておけ」



「了解しました」

「さてコウタ、もう十分休んだ筈だ。再開するぞ」

「は、はいいい」

頑張れよコウタ。応援してるぜ。・・・さて、とりあえず今の運動能力に慣れるか。

「早朝訓練はこれで終了だ。食事と休憩ののち、規定の時間にまたここまで来る様に」

「はい！」

そんな訳で、コウタは結局ずっと走ったり飛んだりと体力作りに励んでいた。一方俺は神機を振り回しながらジャンプで壁際の段差を上ってみたり、段差の淵を掴んでよじ登ったりしていた。

今思うと、確かこんな感じで好き勝手行動するチュートリアルが原作にあった気がする。主人公がかなり早く実戦に移ったのも、適合率が高かったせいで体力作りの必要が無かったのが原因なんだろうか。

ともかく早朝訓練は終了だ。今は七時で、午前の訓練は九時からだったか。二時間も時間があるならシャワーで汗を流してから食事をしても余裕で間に合うな。

問題は隣でへばっているコウタだが・・・まあ、動けない訳では無いらしいし大丈夫だろう。

「ほら、行くぞ」

「ちよ、ちよっと待って・・・もうちよっと休ませて」

「さっさと汗を流して食事しながら休んだ方がいいと思うけどな」

「そもそも、今の状態で食えるかどうかも・・・」

うん、俺は適合率高くて良かった。

今日の配給は原作でもおなじみのでかいトウモロコシだった。不味くは無いかど確かに食べにくい。量があるので腹が膨れるのが唯一の救いといったところか。

テーブルを挟んで俺の向かい側に座っているコウタは始めは全然食事が進んでいなかったが、食べているうちに回復してきたらしく今では普通に食事をしている。

「いいよなトウヤは。体力は問題無いんだし、もう基礎戦術の訓練に移るんだろ？」

「多分な。でもその分実戦が早まるんだろっな」

「実戦かー、先に実戦を経験したらどんな感じだったか教えてくれよな！」

「ああ。ま、多分訓練の一環ですぐ行く事になるんだろっけどな」

そんな会話をしながら食事を進め、同時に同じく食堂で配給品を食っている人達を軽く見回す。

どうやらここはゴッドイーター以外にも、というかアナグラ職員の殆どが食べに来ているらしく、整備班の様なつなぎを着た人から研究者の様な白衣を着た人まで多種多様な格好だ。

最も一番多種多様な格好をしているのはゴッドイーターだ。やけに特徴的な服を着ている人物が居ると思いきや、布地がやけに少ない服を着た人物も居る。

何故こうも自己主張が強い人間ばかりなんだろっか。いつ死ぬかわからないから少しでも誰かの記憶に残りたいとか、そんな意味合

いもありそんな気がするが・・・実際はどうかわからない。

・・・あ、カノンちゃんとジーナさん見つけ。あ、サクヤさんらしき人も見つけ。

「あ、そうだ。俺のアドレス渡しておくな」

「アドレス？ああ、確かターミナルでメール出来るんだっけ？」

「そうそう。ちなみにアドレスも腕輪を使って簡単に渡せるらしいぞ」

「腕輪便利だなあ・・・聞いた話によると腕輪で買い物も出来るんだってさ。貯金から引き落としで」

「え、俺それ知らなかった。一番最初によろず屋に挨拶に行ったのに・・・」

「本当によろず屋行っただ・・・」

そんなこんなでのんびりとした食事を終わらせ、再び訓練の間となった。

きっと暫くはこんなサイクルの繰り返しなんだろう。この平和も今のうちだから、精一杯満喫しておこう。

## 第5話 チュートリアル3（後書き）

- 現在のステータス -

名前：芹沢トウヤ

年齢：17歳

銃身：50型アサルト機関砲

刀身：ブレード（ロング）

装甲：支援シールド（シールド）

制御ユニット：プロトタイプ

強化パーツ：

強化パーツ：

- スキルリスト -

補足時間

アスリート

俊足

『補足時間』

アラガミを見失ってからのMAP補足時間の増加。

このSSではアラガミが移動した際に残ったオラクルの残滓を感知出来る感度の増加としている。

『アスリート』

スタミナが減りにくくなる。

『俊足』

このSSオリジナルのスキル。  
移動速度が上がる。



第6話 もっぐもぐ (前書き)

タイトル全然思いつか(ry  
とりあえず特に捕喰関連で独自設定の嵐なのでタイトルはコレに  
しました。  
大人気の女声5番ちゃんです。

## 第6話 もつぐもぐ

さて、ゴッドイーターとしての基礎訓練が始まって三日が経った。

訓練の内容は基礎体力作り以外では殆どチュートリアルと同じで、しかし訓練用模擬ターゲットは後半まで使わず最初は普通に的を切ったり撃つたりしていた。

俺の神機の他のパーツが届いてから、すぐに刀身をショートに、装甲をバツクラーに変えたので重量が減り、おかげで機動力溢れる動きが可能になった。

あまりにも身軽に動けたので調子に乗って原作のロング強攻撃の様なダツシユ切りを連発していたら、意外と疲れる事に気付いたりもした。

ちなみにまだ銃身は何を使うか決まって無いものの、破碎属性をサポートする為にブラストを使うかと思っっている。というかブラスト使いがカノンちゃんとエリックしか居ないのは寂しいと思うんだ。

旧型使いも新型使いも殆どが連射型のアサルトか貫通特化のスナイパーだし、アナグラ内で見かける銃使いもブラストがやけに少ないし・・・やっぱり誤射しやすいせいで好まれていないんだろうか。それとも単純にブラストの神機に適合する人が少なかったのかもしれない。どちらにしろブラストは不遇である。

そうそう、気になったので銃の訓練の時に誤射についてツバキさんに聞いてみた。

どうやら神機から発射されたオラクルはアラガミのオラクル細胞

の結合を侵食して貫く、もしくはバラバラに破砕するらしいが、ゴッドイーターに当たった場合はそれが発生しないらしい。

というのも、銃身から発射されたオラクルには偏食因子が混ぜられている為、基本的にアラガミにしか効果が無いらしいのだ。当たったとしても衝撃が来る程度らしい。その衝撃も何気に結構大きいらしいが、傷は出来ないから怯む程度で大丈夫だとか。

・・・だが、それはあくまで旧型神機でのデータ。新型はまだ詳しい事が良く分かっていないので、もしかするとアラガミ以外にも効果が発揮されてしまう可能性もあるらしい。その辺りは研究班が早急に調べているらしいので気をつけるとの事だ。

そんな怖い事を言われると銃が使えないんだが・・・近いうちに誤爆対策の対消滅がこの世界でも可能か確かめておくか。

ちなみに剣の事も聞いてみたが、どうやら剣も基本はアラガミを喰い裂く仕組みらしい。なのでゴッドイーターに切りかかってもアラガミの様にはいかない・・・が、それでも刃物なので銃とは違い危険な事には変わり無いとの事だった。

オオグルマは何故アリスに剣ではなく銃で攻撃する様に暗示をかけたかったんだろうか。そっちの方が確実なのに。

さて話題を戻して。

原作チュートリアルのような訓練を続けていき、剣・銃・盾の切り替えは勿論、スタングレネードや罠の設置方法などの各種アイテムの使い方学んだ。

スタングレネードは当たり前だがゲームと違い、注意していないと自分も目が眩んでしまう。光るのを覚悟して受けるとオラクル細胞のおかげですぐに視力が戻るみたいだが、急に受けるとアラガミを同じ様に長時間怯む事になってしまう。

なのでスタングレネードを使う際は必ず仲間に伝えてからにしろとツバキさんから何度も注意された。確かに仲間に伝えずにスタン



グレネードを使ったせいで仲間が死んだなんて展開は最悪だ。ゲームでは適当に使っていたが、ここではきちんと考えて使った方がよさそうだ。

各種兵装の扱いを学ぶと、次は肝心の捕喰・バーストに関するの訓練になった。

どうやら捕喰形態への以降は他の形態変更の様な操作ではなく、剣形態の時に『喰う』と念じると、それに呼応した神機が捕喰形態のあの口を出すらしい。神機と繋がっているからこそ可能な切り替え方だろう。

また、バーストに関しての詳しい話も聞くことが出来た。どうやらバーストは、神機や神機使いよりもオラクルに満ち溢れているアラガミのオラクル細胞を捕喰する事によるオラクルの過剰摂取、それによる神機と神機使いの強制能力強化らしい。

これにより運動能力の強化が行われ、滞空時の余剰オラクルの放出による空中ジャンプやオラクルによる身体組織修復が行われるらしい。

制御ユニットはこの余剰オラクルに方向性を与えてスキルを発現させるもので、まだまだ研究途中らしいが使用し始めてからはゴツドイーター達の生存率が上がったという話も聞く程効果が高い様だ。

それと同時にアラガミバレットとリンクバーストについても聞いた。

どうやらツバキさんは新型の知識はまだそこまで無いらしいのでサカキ博士の受け売りらしいが、アラガミバレットは取り込んだアラガミのオラクル細胞を神機内で弾丸にして放つものらしい。

アラガミの肉体を構成していたオラクル細胞なので、弾丸化するとそのアラガミの攻撃と似た性質の弾丸になるらしい。つまりは喰い干切った細胞をそのまま弾にして撃つ感じか。

そしてリンクバーストは、アラガミのオラクル細胞を完全にオラ

クルへと変換してしまい受け渡しているらしい。何故本人が使えないのかといえば、自分の神機でオラクルに完全変換したものを自分に使うとその神機の因子が強くなりすぎて暴走してしまいかねないかららしい。

これを受け渡すとオラクルに変換した時に混ざり合った神機の因子もオラクルへと変換されるので、普段のバーストよりも強力になるとの事だ。勿論その強化バーストを全て弾丸に変えて濃縮アラガミバレットとして放つ事も出来る。

しかしこのリンクバーストは強力になり過ぎる為、リンクバーストの強化は神機の暴走や使用者の体の負担を考えて三段階までと厳命されている様だ。

・・・とまあ。そんな感じで捕喰に関しては知る事がとても多かった。

実際に訓練用の模擬ターゲット相手に戦った時に捕喰を試みたが、本物のアラガミでは無いというのに凄まじい強化度合いを感じることが出来た。

個人的には更に足が速くなったのが嬉しかった。『蝶の様に舞い蜂の様に刺す』をまさしくそのまま実行出来る程のスピードで、それを見ていたツバキさんも驚いていた。

正直癖になりそうだ。バースト依存症とか意味がわからないが。

そうそう、捕喰の時に素材の回収についても講義を受けた。

ゲームでは素材捕喰をすると三つ手に入ったが、この世界では一つの時もあれば五つを超える時もあるらしい。

その違いは、単純にオラクル結合が解けてたり壊れていないか、それとコアの位置や、アラガミの行動していた年月や強さなんかも関係しているらしい。

例えば戦闘でアラガミを攻撃したとして、もし目を完全に破碎してしまつたら目の素材が手に入る訳が無いという事だ。最も上手く

目を破壊しないと眼石が手に入らないという場合もあるらしいが。

そしてコアの位置だが、どうやら同じアラガミでもコアの位置が違う事が多いらしく、コアに近い場所の素材ほど結合が強い為に戦闘後も形が残りやすい様だ。それに結合が強いとコアが無くなっても結合が解けにくいので回収もしやすいという事だ。

年月や強さについては単純に様々な事を学習し成長した個体程強力になり、それ故に素材も若く弱いアラガミより上等になるという事だ。

ところで、コアを失ったアラガミは放置しているとオラクル細胞が霧散してしまうのに何故回収した素材は霧散しないのか聞いてみた。

が、詳しくは知らんと言われてしまった。どうやら専門用語がたつぷり出てくる様な研究者向きの理由らしく、知りたければ博士に聞いてみると言われた。正直気になるものの面倒でもあるので、多分聞かないと思う。そういうシステムだと納得しておこう。

さて、捕喰以外でも素材の回収は可能だ。そう、その辺に落ちている素材を拾うという事だ。

原作では採取ポイントは光っていたので簡単にわかったが、現実的に考えるとそんな都合の良い事はまずありえない。そもそも固定位置に毎回素材があるとは限らないのだ。

それに関しては原作では素材が無い場所でも採取が可能という事なのでプラスにもなるが・・・どちらにしろ一番確実なのは、やはりアラガミが食事をしていた所を調べる事らしい。

採取では様々なものが手に入るものの、採取しすぎると対アラガミ戦で荷物が邪魔になってしまふ事もある。なのでゲームの様に限界まで採取するのは止めて、行動を邪魔しない程度に抑えておくのが普通らしい。

もし有用な素材が多く溜まっている場所を見つけた場合は、数人

で採取部隊を編成して派遣する事もあるらしい。その際は勿論発見した人物にも報酬があるので積極的に探してみるのもいいかもしれない。

と、そんな感じでチュートリアルな基礎訓練を繰り返して三日経った訳だ。おかげで最初はちょっと怖かった模擬ターゲットも今では問答無用でザクザク切り刻める様になった。

銃の扱いはいまいち狙撃が苦手な上、最近ブラストに変えたばかりでまだ慣れていない。が、モルターやエミッターなら周囲に仲間が居なければ爆風などでほぼ確実にダメージを当てられるので何とかなるだろう。

最もそんな使い方なのでツバキさんからは、

「誤射はするなよ」

と言われてしまったが。とりあえずエイムの練習はちゃんとしようと思う。

「さて、今日の訓練はこれで終わりだ」

そして三日目の今日も、全般的な行動訓練とゲームでいう応用チュートリアルをこなして終わった。

最近のコウタも体力作り以外の訓練も入ってきている様で、疲れるけど結構楽しいと一緒に食事をしている時に言っていた。

最近の訓練が別の時間、別の場所で行われているので訓練中はあまり会っていないが、この後の食事時に今日の訓練の話題で盛り上がる事になるだろう。

といっても、今日は俺には特に話す様な事は無いけどな。

「さてトウヤ。異例の速さだが、明日からは第一部隊に配属となり新兵としての実戦訓練へと移る事になった」

「えっ？・・・本当ですか？」

「ああ。・・・本来ならばもう少ししっかり訓練をしたかったのだが、数少ない新型、それも適合率が高く優秀な新型という事で上層部が実戦投入を急かしていてな・・・」

「成る程、色々事情がありそうですね」

「すまないが、そういう事だ」

まあそういう事もあるだろうが・・・そうか、明日からはとうとう実践か。多分リンドウさんとオウガテイル討伐だとは思っけど、実際はどうなるかわからないから覚悟はしておこう。

「今日はゆっくり休んで英気を養っておけ。以上だ」

「ありがとうございます！」

さて・・・食事中にコウタに話す話題が出来たな。

第6話 もっぐもぐ (後書き)

トウヤ君の神機アサルトからブラストに変わりました。  
それ以外は変更なし。

かなり独自設定で解釈しました。何処がおかしい所があるかもしれ  
ませんね。

## 第7話 悪鬼の尾（前書き）

タイトルがミッション名という事で期待した方、ごめんなさい。  
何だかんだで実戦は次回になりましたw

## 第7話 悪鬼の尾

今の俺は明らかにソワソワしているだろう。自分でも自覚出来る程に落ち着きが無くなっている筈だ。

なにせ、まだいつもの起床時間にもなっていないのに目が覚めて着替えていて、それからベッドに座ったりソファに座ったりとあちこち動き回っているからだ。

時折ターミナルで自分の神機を確認したり、アラガミの情報を見てもいたりもしている。全く落ち着きが無い。

しかし今日だけは許して欲しい。理由は簡単、基礎訓練が昨日で終わったせいで今日からは実戦訓練なのだ。しかも訓練というよりは、先輩神機使いのサポートはあるとはいえ普通にミッションをこなす新兵扱いだ。

つまり今日はある意味本格的にゴッドイーターになる日という事だ。そりゃ緊張もするしソワソワするだろう。今だって冷静に思考しているつもりではあるものの、実際は部屋の中を歩き回っているのだ。

そのままソワソワしているとコウタが部屋にやってきた。どうやら朝食と一緒に食おうという誘いの様だ。

このまま部屋でソワソワしても仕方が無いのでその誘いに乗り、一緒に食堂へ行く事に。だが・・・

「拳動不審だなあ」

「うつせえ仕方無いだろ」

食堂で配給を食いながらも、これからの事を考えてソワソワしている俺を見てコウタは笑っていた。この野郎、俺もコイツの初実戦の時にソワソワしてたら鼻で笑ってやる。



とりあえず食事をしながらコウタと会話をする事で多少は落ち着いてきたが・・・そのおかげで周囲のゴッドイーター達数人から微笑ましいものを見る目で見られている事に気付いた。恥ずかしいっつーの！！

「ははっ落ち着きが無いなトウヤ」

「あ、タツミさん」

「おはよっすタツミさん」

今度は恥ずかしさに悶えている俺に話しかけて来たのは大森タツミさん。原作では色々とかっこいい場面があったショート使いで、ヒバリちゃんに御執心の頼れる人だ。

今世では俺が始めてアラガミに襲われて逃げていた時に防衛に来てくれた人で、俺の逃げ足がゴツドイーターとしても通用すると言ってくれた人だったりする。

実は訓練中の数日でたまたま食堂で見かけたので当時のお礼を言ったのだが、そのまま一緒に食事をして仲良くなり、既にメールのアドレスも交換していたりする。

俺もショートを使う事にしたので時々アドバイスを貰ったりしている。

ちなみにタツミさんと同じ部隊という事でブレンダン・バーデルさんとも話をした事があるが、ブレンダンさんは真面目な人だった。といっても堅物な訳では無く、タツミさんと会話で盛り上げられる程度には愉快な人だったりする。

勿論カノンちゃんとも会話をした。会話の流れで俺がプラストを使う事にしたと言った時に物凄く嬉しそうにしている、その姿が最早同い年どころか年下にしか見えなくてちょっとキュンと来た。でも本性を考えると逆に恐ろしい。

そうそう、勿論ブレンダンさんとカノンちゃんともアドレスは交

換した。まだ先だとは思うものの、今後一緒にミッションをこなす事もあるだろうから交換しておいた方がいいだろうとはブレندانさんの言葉。

そしてカノンちゃんは「どうぞっ！」と普通に渡してきた。ちなみに実際にカノンちゃんとちゃん付けで呼んでしまったりしたが、全然気にしていなかった。一応聞いてみると別にちゃん付けで良いと言われたので遠慮無くちゃん付けで呼ぶ事にしている。

まあ年上とはいえ19歳だしな。たった2歳しか変わらないからそこまで気にしないだろう。

「聞いたぞ、もう実践訓練なんだってな。凄いいじゃないか」

「いやあ、新型って事で色々あるみたいなんですよね。全然訓練してないんで正直不安です」

「でもトウヤの足の速さなら危なくなっても逃げれんじゃない？」

「それにいくらか妙な事情があったとしても、ツバキさんはまだ戦えない新兵を実践訓練に出したりしないさ」

そうか、そりゃそうだ。使えない新兵を実戦に出す訳が無いんだから、つまり俺は一応無駄死にはしないだろうと判断されたって事なのか。

うん、微妙に勇気が湧いてきた。緊張している事には変わりはないが、まあ何とかなるだろう。

「ま、頑張れよ！そのうち一緒にミッション行こうぜ！」

「はい、その時はよろしくお願いします」

「俺もその時にはお願いします！」

そしてタツミさんはそのまま食堂の入り口付近で立っていたブレندانさんと一緒に出て行った。

・・・そういえばブレندانさん、タツミさんが来た時くらいか

らあそこで立つてた様な。もしかしてタツミさんはブレンダンさんを待たせてこっちに来たんだろうか。

うわぁ、そうだとするとそれほど心配になるくらい挙動不審だったのか？ 恥ずかしい上に申し訳無い。勘弁してくれ。

「はぁ、とりあえず行くか」

「頑張れよ！ 俺もすぐ追いつくからな！」

「おう、お先に実戦に行ってくる」

さて、ロビーのベンチで座っている事数分。そろそろ一緒にミッションに行く先輩神機使いが来る筈だ。

原作通りならリンドウさんなんだろうが、この世界は微妙に原作と変わっている部分もあるので違う人になる可能性もある。とはいえ流石に初実戦の新人を連れて行くんだから、ミッション生還率の高いリンドウさんと組ませるのが普通だろう。

というかターミナルの人物データにもちょっとだけ書いてあったけど、リンドウさんと組んだら本当に生還率が九割だった。死んだ一割もどうやら偵察部隊の情報の不備が原因だったらしく、実際には十割と言ってもいいのかもしれない。

仲間を死なせない上に単身でウロヴオロスを討伐出来る実力の持ち主・・・まさしくゴッドイーターと言すべき人だろう。まるでリアルチートだ。

しかもイケメンで美人の彼女持ちで、最後には結婚もして子供まで出来るし、神機は神機で色々と凄いいし・・・なんだこれ、まるで最強オリ主じゃないか。中二病要素も持ってるし完璧すぎる。

ちくしょうアラガミ化したら羽根筆つてよろず屋に売り払ってやるのか。

そんなどうでもいい事を考えながら人待ちをしていると、階段を降りてくるイケメンを発見した。そう、リア充のリンドウさんだ。

「あ、リンドウさん。支部長が見かけたら、顔を見せに来いと伝えてくれと言っていましたよ」

「オーケー、見かけなかったことにしてくれ」

あんた少尉で隊長で特務もやってるのにそれはダメだろう・・・それはさておき、軽く辺りを見回して俺の居場所を確認した後、諦めた様な顔をしているヒバリちゃんをスルーしてそのままこちらへと歩いてきた。

ヒバリちゃんの反応を見るに、何回も似た様な対応をしているんだろうな。

「よう新入り。俺は雨宮リンドウ、形式上お前の上官にあたる・・・が、まあめんどくさい話は省略する」

「なんというか、軽いですね」

「堅苦しいよりはマシだろ？ま、とりあえず、とつとと背中預けられるぐらいに育ってくれ。な？」

「はい、頑張ります」

さて、原作ではこの後サクヤさんが来る筈だが・・・どうやらここでは来ない様で、とりあえず多少会話をした後リンドウさんと一緒にヒバリちゃんの所へ移動。

ゲームではシステム上の理由で先にミッションを受注してからののだが、ここではそんなゲーム上のシステムは関係無いので、特別なミッション以外は人が集まってから受注する様だ。

先にブリーフィングを行う様なものはオペレーターから受ける様なものではなく、きつとツバキさんの様な上の人間から通達されるものなのだろう。

・・・一応新人の実戦訓練も重要だと思っけど、その辺は気にしない方がいいんだろう。

「さーて、新人の初実戦だ。何かいいのは無いか？」

「そうですね・・・旧市街地地区にてオウガテイルの目撃がされていますので、こちらの討伐でよろしいでしょうか？」

「実践訓練には丁度良さそうだな。じゃ、それで頼む」

どうやらミッションは原作と同じオウガテイルの討伐らしい。確か原作では『悪鬼の尾』だったか。

オウガテイルなら戦った事は無いものの訓練用ターゲットと似た形だし、それに一般人の頃に実際に見た事があるからそれほど気負わずに済む。

とはいえやはり緊張するものは緊張するのだが。

「はい、ミッション受付完了しました。後武運を」

「はいよ。さて、次はターミナルで武装確認の仕方と、後は道具の確認だが・・・」

「あ、一応ツバキさんから色々話を聞いていたので道具は準備してあります。ターミナルも初日から弄ってるので」

「おお？そうか、んじゃ一応確認だけしておくぞ」

「はい」

一旦先程まで居たベンチの元へ戻り、腰につけていたポーチの中身を傍のテーブルへと並べた。

俺が用意していたのは回復錠が三つとスタングレネードが三つ。原作を考えると全然少ない気がするものの、ポーチが小さいのだから仕方が無い。

「まあ、今回はこれでも大丈夫だとは思っが・・・お前、バックパ

ツクは使わないのか？」

「足の速さを活かして動き回るタイプなんで、何か背負ってる動きが制限されるんです」

「そうか、で確かにな。でもまあ近い内に慣れておいた方がいいぞ」  
「了解しました」

バックパックは容量が大きい為回復錠等を多く持つていく事ができ、かつ回収した素材を多く持つて帰る事も可能なので、金儲け目当ての人や新人は大抵使っているんだそうだ。

しかし背中重量等で動きが制限されるのは確かなので使わない人もいるらしい。そういう人は主に素材回収を目的とした簡単なミッションをして、その際にバックパックを使っているらしい。

リアルにリタイアマラソンをする人がいるのは少しだけ驚いた。素材が大事なのはゲームも現実も変わらないらしい。

と、そんな会話をしていると誰かが近づいてきた。

「あ、もしかして新しい人？」

「あー、今厳しい規律を叩き込んでるんだからあっち行ってなさい、サクヤ君」

「了解です、上官殿」

(間近で見ると本当にありえない露出度だな)

橘サクヤ。スナイパー型の旧型神機使いであり、無印版では見事な誤射率のレーザーでプレイヤーの邪魔をしてくれる人物。そしてBURSTでは超反応回復レーザーで主人公を助けてくれる程に進化した人だ。

ちなみにリンドウとは既にラブラブチュッチュしている中で、シナリオ後は結婚して子供も産む。イケメン少尉を射止めた勝ち組だ。・・・しかし本当に露出度高すぎるだろう。俺の守備範囲外だから

正直あまり興奮はしないけど、ここまで薄着だと興味無くても気になるわ。

まあそんな事はどうでもいい。とりあえずこの僅かなやりとりだけで微妙に桃色な空気を撒き散らすの止めてください。仲が良いのはわかったから。

「と、まあ、そういう訳で……そろそろ時間だな。出発するぞ」  
「はい！」

さて、初実戦の始まりだ！

第7話 悪鬼の尾（後書き）

何だか最近微妙に忙しくて少し遅れてしまいました。  
今後も少し間が空く様になるかもしれません。



## 第8話 家に帰るまでがミッション(前書き)

どうも、更新停止に定評のある作者です。

他の作品ばかり書いていてこっちを全然書いていませんでしたが、  
ようやく更新です。

それでは、どうぞ。

## 第8話 家に帰るまでがミッション

かつて多くの人々が行き交い、昼夜問わずに光に溢れていたであろう街。その成れの果てが今俺の目の前に広がっていた。

崩れ落ちた建築物や瓦礫があちこちに並び、かろうじて天へと伸びるその形を保っているビルにも、まるで何かに喰われてしまった様な不自然な形の空洞が存在している。

地面を塗り固めていた筈のアスファルトはもうどこにも見当たらず、あるのは乾いた土と砂のみ。まさしく荒廃という言葉が似合う世界がそこには広がっていた。

――贖罪の街。フェンリル極東支部から最も近い場所にある要警戒地区の一つであり、また神機使いにとってもアラガミや多くの素材が発見される稼ぎ場所である。

「ここも随分荒れちまったなあ」

「やっぱり昔はまだ形が残ってたんですか？」

「ああ。アラガミが喰ったり戦闘で崩れたりして、ご覧の有様だがな・・・さて新入り。実地演習を始めるぞ」

旧型ロングブレードの神機『ブラッドサージ』を肩に乗せながら俺と向かい合うリンドウさん。口調からはアナグラに居た時と同じ様な軽さを感じるが、表情は真剣だ。

当たり前だろう。いくら相手がオウガテイルとはいえ、一緒に戦う俺はまだどれ程の腕前かもわからない新人なのだ。これがソーマとかなら気が楽だろうが、実戦未経験の新人とのミッションで気が抜けるはずが無い。

「命令は三つ。死ぬな、死にそうになったら逃げる、そんで隠れる。運が良ければ不意をついてぶっ殺せ。・・・あ、これじゃ四つか」

「つまりは生きろって事ですね」

「そういう事だ。それさえ守れば、あとは万事どうにでもなる」

そりゃそうだ。死んだらどうにもならないけど、生き残ればリベンジも出来るかもしれないしな。・・・トラウマになって戦えなくなる可能性も否定出来ないが。

「さーて、おっ始めるか！」

「はい！」

さて、ミッション開始だ！

とは言ったものの、いきなりオウガテイルが見付かる訳でも無いのでまずは探索からだ。周囲を警戒しつつ、時折注意点や地形を利用したちよつとしたアドバイス等を教えてもらいながら歩を進める。現在はゲームでいう教会の外周部を歩いていて、恐らくだがマップ右の辺りをマップ上部へ向けて進んでいる感じだろうと思われる。・・・実際に歩いてみるとゲームとは違う部分も多々ある為に、断言は出来ないのだが。

「あ、素材がありそうな気がする・・・よし、やっぱりハーブがあった」

「凄いな新入り・・・よくもまあそんなに素材を見つけられるもんだ」

「あははは・・・運がいいんですよ」

探索しながら歩き回っているうちに俺は既にいくつかの素材を回収していた。これも転生特典の一部なのか、原作で素材が落ちていた場所の辺りを調べると素材が見付かるのだ。流石に複数見付かるなんて事にはなっていないが、これは正直とても助かる。

おかげで先程拾ったハーブ以外にも輝石や廃棄された閃光弾も拾った。これは周囲の人からみたらある意味幸運スキル持ちみたいに思われるんだろうか。

そこまで考えて、素材回収やアラガミ討伐で金を稼ごうとしているカレルに頻繁にミツシヨンに誘われる未来を幻視した。原作を思い返すと物凄くありえる未来なだけにあまり笑えない想像だった。

「しかし、中々見付かりませんね」

「まあ今回撃されたオウガテイルは一匹だけみたいだからな。もし複数匹居たとしてもせいぜい三匹がいい所だ。そう簡単には見付からんさ」

「一匹だけでも積極的に討伐に向かうんですね」

「放っておくとどんどん学習してとんでもない事になるからな。同じオウガテイルでも長く学習した奴は下手な中型よりも手強い。尤もただ年月が過ぎるだけでも手強くなるがな」

今回ののは発生したてみたいだから比較的安心だがな、とリンドウさんは軽く笑っている。

なるほど、豪華景品とかに登場する頑丈なオウガテイルはそういった類のアラガミだったんだろう。墮天種やヴァジュラテイルも元々は普通のオウガテイルだったんだろうし、そう考えれば例え一匹単位でも討伐しに行くのが一番確実かつ安全だ。

年月に関しても、時間が過ぎた分だけオラクル細胞の知能が全体的に上昇するからだろう。前世でのプロモーションPVでは大型アラガミも簡単に討伐されていたが、恐らくその時はまだオラクル細胞全体がそこまで知識を得ていなかったんだろうと思う。

つまり将来はアラガミがもっと強くなるという事で・・・まあそれはさておき、また一つ原作ミツシヨンの裏側を知る事が出来たな。

「でも、そろそろ出てきてくれないと緊張感が持続しませんよ」

「気持ちは分かるが油断するなよ？その曲がり角を曲がった瞬間に襲われたりなんかするかもしれないぞ？」

「リンドウさん、それはフラグですよ……」

「フラグ？」

「あつと、ゲーム用語です。簡単に言うとなパターンみたいなものです。こうなったらこうなる、みたいな」

「なるほどな。つまりはさっきの台詞のせいで、本当にオウガティルが現れるって事か？」

「そんな感じですよ」

お互いに笑いながら、しかし本当にそんな事態になったら困るので注意しつつ曲がり角へと進む。その先には広い空間が広がっている筈だ。

ざつと踏み出し角を曲がった先にはやはり広いスペースが存在していた。そして……先程の台詞はやはりフラグだったのか、そこにはオウガティルが存在し、こちらに気付いて威嚇をしていた。

「……ええー」

「おいおい……冗談キツイぜ」

但し、十五匹という群れでだが。

……さて、これはどうすればいいんだろうか。動きの速さとスタミナには自信があったのでオウガティルとの戦いでも生き残れると思っていたが、流石にこんな群れだとその自信も碎けそうだった。

「リンドウさん、さっき言った命令なんですけど」

「何だ」

「逃げる事も隠れる事も出来なかったら？」

ちよつと早すぎる台詞だが言わずには居られない心境を許して欲

しい。

それはともかく、恐らく『生きる事から逃げるな』とは言われな  
いだろう。あの台詞は原作でのあの流れがあつてこそそのものなので、  
きつとそれとは違う命令になるはずだ。

そしてその台詞も、何となくであるが予想が付く。というか、こ  
れくらいしか選択肢が無い。

「そうだな、その時は一つしか無い」

「ですよね」

「ああ」

オウガテイルの群れがこちらへと向かつてくる光景を前に、リン  
ドウさんはブラッドサージを構える。俺もそれに習い、まずは遠距  
離から先手を打つ為に神機を銃形態へと切り替える。

ブラスト型なので飛距離や連射性能は大した事は無いが、モルタ  
ーの爆破を上手く使えば相手の足止めやコンビネーションの邪魔が  
可能だ。最もリンドウさんが接近戦を始めたら使わない方がいいだ  
ろうが。

「ぶっ飛べえ！」

火属性のモルターをオウガテイルの群れの中心付近に落ちる様に  
発射し、運良く一匹の背中に直撃して爆破。周囲に居た数匹が爆破  
に巻き込まれてダメージを負い、それが原因で吹き飛ばされた奴が  
他の奴へぶつかったおかげで半数以上の足止めに成功した。

さて、ここからは先に接触する数匹相手に接近戦だ。なるだけ早  
く数を減らしておかなければ押し止めた奴らがすぐに合流してし  
まう。

「行くぞ！ぶっ殺される前にぶっ殺せ！！」

「了解！！」

二人同時に相手へ向かって飛び出し、左右の端に居る一匹の横をすり抜ける様にしながら切りつける。そこからは乱戦。

俺は自慢の機動力とスタミナを活かして常に動き回りながら、相手の機動力を削ぐ為に主に足を狙ってナイフを走らせていた。数回で片足を使えなくする事が出来るとわかったので、一匹に集中せずにひたすら群れの機動力を削ぎ落とす事に集中する。

時折尻尾が掠ったり針が腕に当たったりして軽く負傷しながらも走る。周囲を見ると、リンドウさんはオウガテイル達の間をすり抜けながら力強い斬撃でオウガテイルを斬り伏せていた。かつこよすぎる。

「喰わせて貰うぞ！」

モルターで吹っ飛ばした奴らが合流する直前に捕喰を行いバーストモードに移行。飛んでくる巨体や針を少し大きく回避しながらひたすら斬り刻み、時には蹴りや盾での殴りでぶっ飛ばして相手の動きを阻害する。

そして体制の崩れたオウガテイルにリンドウさんがトドメを刺す。俺のやってる事はほぼサポートの様なものだが、初戦でこんな乱戦を経験するハメになったんだからその辺は勘弁して貰いたい。いきなり大活躍なんてものは物語の中だけだ。

「後ろだ新入り！」

「うおお！？」

リンドウさんの声と同時に背中にゾクッと悪寒が走り、その勘を頼りに横に転がるとさっきまで居た場所にオウガテイルが飛び掛っていた。あつぶねえ・・・

「油断するな！」

「すいません！！！」

油断はしていなかったものの、もしかしたら初実戦の緊張が反応を鈍らせていたのかもしれない。今思えばいつもよりもスタミナの減りも早いかもしれない。

実戦での命のやり取りは思っていたよりも負担が大きいのもかもしれない。慣れるまではあまり無理はしない様にしよう。

最後の一匹は俺がタイムマンで討伐する事が出来た。討伐してから辺りに残っているオウガテイルの死体を捕喰して素材を回収し終わると、緊張が解けたせいなのかその場に座り込んでしまった。

スタミナには自信があつたのに今の俺はかなり疲れてしまっている。体内に存在するオラクル細胞の効果で時間をおけば疲労はある程度回復するだろうが、精神は別だ。

息を荒くして座り込んでいる俺とは対照的に、リンドウさんは自然体のまま俺の様子を見て笑っていた。流石に汗一つ無いなんて事は無いが、呼吸は乱れていない。これが経験というものか……

「何とか生き残れたな！」

「いや、本当ですね……。つかなんであんな大量に」

「大方調査班がきちんと働かなかつたんだらうよ」

軽く言ってるものの内容はかなり問題じゃなからうか。

「それはともかくとして、だ。新入りも中々やるじゃねえか！足が速いとは聞いていたが、あれほどとはなあ」

「足の速さとスタミナは唯一の自慢ですからね……。スタミナは今  
回限界近いですけど」



「初実戦であれなら上出来だ。あとは経験を積みばいい・・・さて、そろそろ帰るぞ。このままここに居たらまたアラガミに出くわしそうだ」

「りょうかーい・・・」

のろのろと立ち上がる俺を見てリンドウさんは笑っていた。

「デビュー祝いだ。今回回収した素材は全部お前にやる」

「それ、リンドウさんがいらなからじゃ無いですよね？」

「はっはっは・・・晩飯も奢ってやるよ」

ま、いいか。怖かったり疲れたりしたものの、その分儲ける事が出来たと考えれば喜ばしい事だ。

早く自室で休みたいし、さっさとアナグラに帰ろう。

ミッション名 悪鬼の尾

討伐対象 オウガテイル×1 オウガテイル×15

報酬 350fc 6000fc

獲得アイテム

小型アラガミ素材多数

オウガテイル素材多数

ハーブ

輝石

廃棄された閃光弾

## 第8話 家に帰るまでがミッション(後書き)

内容確認の為にまた始めからやり直そうか悩んでいます・・・  
とりあえず今度は長期間止まらない様にしたいです。

## 第9話 ショッピング・モール(前書き)

相変わらず更新停止に定評のある作者です。

しかも今回はきりのいい所で切ったら凄く短いという有様。

## 第9話 ショッピング・モール

疲れた。初ミッションの感想はそれに集約された。

初めての实战へと向かう途中から緊張していたし、オウガテイル十五体と戦うなんてとんでもない事態に遭遇してしまったのは肉体的にも精神的にも負担が大きかったのだ。

幸いというべきか、綺麗な状態のオウガテイルのコアを手に入れる事が出来たので多少の報酬アップにも繋がったらしい。更に調査隊の大きな偵察ミスの負担を被ったという事での見舞い金だか何だかしらないが、諸々の理由で更に報酬が増えるらしい。

その結果報酬は6000fcという初任務のオウガテイル討伐とは思えないくらい報酬を手に入れてしまった。ミッション報告後に振り込まれた報酬を見て思わず驚愕の大声を上げてしまったが今回は許される筈だ。

それはともかく、これなら装備を充実させる事も出来れば嗜好品を買う事も出来るだろう。心身の負担が大きかったがそれに見合う報酬を得る事も出来たのでよしとしよう。

「いいなあ一気に金持ちじゃんか。何か奢ってくれよ！」

「はっはっは、いいだろう。よろず屋で適当に奢ってやるよ。安いかな」

「おお！マジで！？言ってみるもんだな！」

晩飯を食っている時にコウタにミッションの事を話すと、自分の实战の時の事を想像したのか顔色が悪くなっていた。が、すぐにこういう事を言ってくる辺りはいつものコウタだ。

随分と気楽なものだが、まあそれがコウタの持ち味だろう。真面目な状況ではきちんと空気を読んで真面目にやるし、ここはむしろプラスな点だろう。

さて、早速何かを奢ってくれという話になったので、食後によらず屋へと向かう。

ちなみによらず屋は夜10時まで営業している。それ以降になると殆どのフェンリル職員や神機使いが自室で休んでいるので、営業していてもあまり意味は無いらしい。

深夜シフトの人間からは少々不満が出る営業形態ではあるが、よらず屋が一人しかいないのだから仕方が無い。なので深夜シフトの人間は仕事前か、仕事が終わった後に行く事になる。

幸い朝は4時という早い時間から営業しているのでそこまで大きな不満は出ていないらしいが。

「お、いらつしゃい。何か入用かい？」

「はい、少し。．．．ほれコウタ、何かあるか？安いものな」

「そーだなあ．．．」

コウタが嗜好品を見ているのを横目に俺は店売り装備の目録を眺める。

刀身や銃身は1段階強化までは販売している様なのでナイフ改を買おうかと思つたが、ナイフ改程度なら素材を集めて強化した方がいいかと思いなおす。銃身や盾もまた同じ。

なので買うべきは制御パーツと強化パーツとなる。まずはバースト時に余剰オラクルを制御して特殊な効果をもたらしてくれる制御パーツを選ぶ事にしたんだが．．．

「迷うな．．．」

原作だつたらとりあえず全部購入し、剣攻撃力が上昇するソルジャーパーツを装備しておくのだが．．．死んだら終わりなこの世界では守りに入った方がいいだろう。

ならば被ダメージ減少のディフェンダーか、アラガミの位置を  
範囲に渡って感知出来る様になるスカウトが良さそうだ。

少し悩んだものの、今回の擬似ダンシングオウガの様な事になっ  
た時に確実に相手を補足する為にスカウトを購入する事にした。こ  
れで400fc。

次に強化パーツだが、制御パーツは守りに入った為にこちらは攻  
撃的なものにしようかと思う。

とはいえ店売りの強化パーツだと大した事は無いものばかりなの  
で気休め程度だろうが・・・とりあえずショートブレードの属性が  
切断と貫通なので、その二つの属性を強化するパーツを選んだ。

これで合計・・・あれ、4400fc?強化パーツってこんなに  
高かったっけ?何か勿体無い気がしてきたが・・・まあ折角の初報  
酬だから、盛大に使ってしまったてもいいだろう。

今回の報酬が6000fcだったから残金は1600fc。これ  
でコウタに奢るものの値段次第だが、きつと1000fcは残るだ  
ろう。

「すみません、これと、これと、これをください」

「おお?新人の割に随分羽振りがいいねえ。実は金持ちとかかい?」

「いえ、初仕事で予想外の事態が起きて報酬が増えたんです」

「なるほど、何があったか知らんが大変だったみたいだな」

4400fcを支払う。購入したパーツは明日になれば倉庫に送  
られているとの事だった。明日朝起きたら早速ターミナルで整備部  
に装備注文をしておこうと思う。

「で、コウタ。まだか?」

「いや決まったよ。ほい」

「バガラリーのフィギュア・・・」

コウタはコウタだった。というか100fcのフィギュアってこの世界の基準では高いのか低いのか・・・

微妙に高い気がするもこのくらいなら何ら問題は無いので仕方なく奢る事にする。コウタのテンションはほぼMAXだ。

「よーし！早速部屋に戻って眺めるぜ！」

「あーそーですか。頑張れ」

「おう！ありがとなトウヤ！」

しかしフィギュアまで販売しているとは、よろず屋恐るべし。

コウタと別れた後自室に戻った俺は、寝るにも早い時間なので軽くターミナルを色々弄る事にした。

とりあえずこの世界でも実用的と思われるバレットを転生特典バレットエディットで製作する。といっても、対消滅を利用した誤射防止用のモルターだが。

ゲームで作った様な連続爆破系統のバレットも作るうか迷ったものの、銃身の保有オラクルを一気に消費するバレットを使用するといざという時に困る可能性があるので止めた。

結局バレットエディットで作ったのは、Lサイズ爆発の対消滅モルターを四属性分だけだった。まだターミナル上で作っただけで完成品のバレットにしていけないが、近々作るうと思う。お金と相談しつつ。

バレット製作が終わると時刻は9時。まだまだ寝るには少し早い時間だが、初ミッションの疲れか既に眠くなってきた。

翌日は早朝の基礎訓練と午前にまたミッションがある筈なので、明日まで疲れを引き摺ってしまわない様に早めに寝た方がいいだろう。

さて、明日のミッションは・・・原作通りにサクヤさんと嘆きの平原なんだろうか？



## 第9話 ショッピング・モール（後書き）

そういえばモンハン3がPSS3でHDリマスターされますね。  
GEBもリマスターされたら買おうか・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1498p/>

---

かみもぐ日記

2011年6月10日17時00分発行